

南薩縦貫道（川辺道路）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V

みや の うえ
宮ノ上遺跡 縄文時代以降編
なき の はら
鳴野原遺跡B地点

(南九州市川辺町)

2012年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター





序 文

この報告書は、主要地方道鹿児島川辺線地域高規格道路南薩縦貫道（川辺道路）改築事業に伴って、平成16年度と17年度に実施した宮ノ上遺跡の発掘調査のうち、縄文時代以降の調査成果と、平成17年度から平成18年度に実施した鳴野原遺跡B地点の調査成果を報告するものです。

宮ノ上遺跡は、南九州市川辺町に所在し、鳴野原台地上に残る段丘に形成された遺跡です。平成21年度に刊行した旧石器時代編の発掘調査報告書では西日本有数となる多数の石器の接合資料が復元され、石器製作の様子が具体的に分かる資料として注目を集めましたが、今回報告する縄文時代においても、個性的な土器や石器が多数出土しています。

また、鳴野原遺跡B地点では、10基の集石とともに、県内でも珍しい壺形土器を含む塞ノ神A式土器が出土しています。

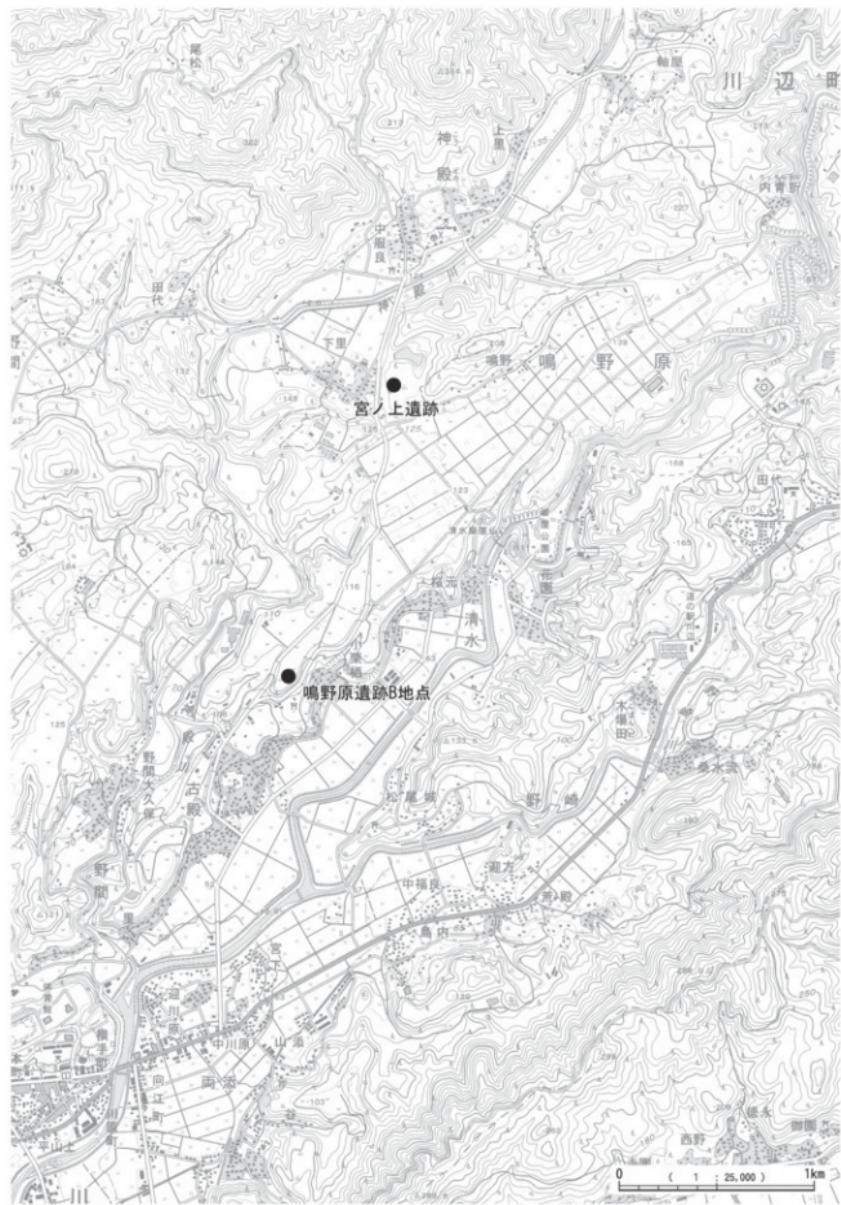
今回の調査により、南九州を舞台とする縄文時代の人々の活動の一端を明らかにする資料を、さらに充実させることができました。

本報告書を県民をはじめ多くの方々にご覧いただき、地域に所在する埋蔵文化財の持つ多様な価値を御理解いただくことにより、国民の共有財産として文化財が保護・活用されることを祈念しております。

最後に、調査に当たり、ご協力頂いた南薩地域振興局建設部、南九州市教育委員会、関係機関及び発掘調査に従事されました地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 寺田仁志



宮ノ上遺跡・鳴野原遺跡B地点の位置図

報 告 書 抄 錄

例　言

- 1 本書は、主要地方道鹿児島川辺線地域高規格道路南薩縦貫道（川辺道路）整備事業に伴う「宮ノ上遺跡」縄文時代以降幅および「鳴野原遺跡B地点」の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県南九州市川辺町神殿に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、鹿児島県土木部道路建設課（加世田土木事務所：現南薩地域振興局建設部）から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、宮ノ上遺跡が平成16年5月10日から平成17年9月27日まで実施し、整理作業・報告書作成は平成19年度から平成23年度まで実施した。鳴野原遺跡B地点は、発掘調査を平成17年2月18日から平成19年2月20日まで実施し、整理作業を平成23年度に実施した。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 6 宮ノ上遺跡の遺物注記の略号は「ミヤ」、鳴野原遺跡B地点の略号は「ナキB」である。
- 7 挿図の縮尺は土器が1/3、石器が4/5または2/5を基本とする。しかし、一部の資料についてはこの限りではない。挿図の縮尺は各図面に示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は南九州地域振興局建設部が提示した工事図面に基づく海拔高である。
- 9 発掘調査は埋蔵文化財センターの指揮・監督の下に、労務管理、測量等の一部業務を新和技術コンサルタント株式会社に委託した。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は調査担当者と新和技術コンサルタント株式会社が共同で行い、実測図作成の一部については株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 11 造構実測図のトレースは、整理作業員の協力を得て馬籠亮道が行った。
- 12 石器の実測・トレースは整理作業員の協力を得て馬籠亮道が行い、一部を株式会社九州文化財研究所、株式会社パスコに委託した。その監修については馬籠亮道、長野眞一が行った。
- 13 遺物の写真撮影は、吉岡康弘・西園勝彦・辻明啓・馬籠亮道が行った。
- 14 整理作業・報告書作成にはデジタル技術を導入し、分布図、実測図等の挿図データの作成、デジタル写真処理、編集等の作業は整理作業員の協力を得て馬籠亮道が行った。
- 15 本書の執筆は、長野眞一・馬籠亮道・内山伸明・小林晋也・富山孝一が分担して行い、編集は馬籠亮道が行った。
- 16 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。また、本書に使用したデータは鹿児島県埋蔵文化財情報管理システム及び埋蔵文化財情報データベース(<http://www.jomon-no-meri.jp>)で公開する予定である。

本文目次

第1章 発掘調査の経過	1	第V章 善野原遺跡B地点の調査概要	207
第1節 調査に至るまでの経緯	1	第1節 発掘調査の方法	207
第2節 事前調査	1	第2節 道路の構造	207
第3節 本調査	1	第3節 整理作業の方法	208
第4節 報告書作成	4	第47章 善野原遺跡B地点の調査成果	213
第Ⅴ章 道路の位置と環境	5	第1節 道構	213
第1節 地理的環境	5	第2節 土器	224
第2節 歴史的環境	5	第3節 石器	230
第3節 善野原台地の発掘調査	7	第48章 自然科学分析	245
第Ⅵ章 宮ノ上道路の調査概要	9	第1節 分析の概要	245
第1節 発掘調査の方法	9	第2節 宮ノ上道路及び善野原道路B地点における放射性炭素年代測定	245
第2節 道路の層序	10	第3節 宮ノ上道路及び善野原道路B地点出土石器石材の産地推定	247
第3節 整理作業の方法	13	第49章 道構	263
第Ⅶ章 宮ノ上道路の調査成果	17	第1節 宮ノ上道路の各時期のまとめ	263
第1節 縄文時代早期の調査	17	第2節 宮ノ上道路における土器動向と利用状況について	265
第2節 縄文時代前期～中期の調査	25	第3節 宮ノ上道路現況における縄文時代後期前の土器群との評価	266
第3節 縄文時代後期～晩期の調査	26	第50章 善野原遺跡B地点のまとめ	269
第4節 古墳時代の調査	203	第5節 善野原遺跡B地点における変形土器の破片分布分析	269
第5節 古代～中世の調査	204	第6節 善野原遺跡B地点の変形土器製品について	270

写真図版

挿図目次

第1図 周辺道路位置図	6	第44図 6類土器分布図	41
第2図 川辺道と開通道路位置図	8	第45図 7類土器分布図	41
第3図 宮ノ上道路周辺地形およびグリッド配置図	9	第46図 7A類土器実測図(1)【2本並行沈綴文】	42
第4図 宮ノ上道路基本土層図	10	第47図 7A類土器実測図(2)【2本並行沈綴文】	43
第5図 宮ノ上道路土層断面図(1)	10	第48図 7A類土器分布図(1)	43
第6図 宮ノ上道路土層断面図(2)	11	第49図 7A類土器分布図(2)	44
第7図 宮ノ上道路土層断面図(3)	12	第50図 7A類土器実測図(3)【3本並行沈綴文】	45
第8図 造構実測図データ処理工程	14	第51図 7A類土器実測図(4)【3本並行沈綴文】	46
第9図 造物実測図データ処理工程	15	第52図 7A類土器実測図(5)【3本並行沈綴文】	47
第10図 V層遺構配置図及び周辺遺物垂直分布図	17	第53図 7A類土器実測図(6)【3本並行沈綴文】	48
第11図 V層遺構実測図	17	第54図 7A類土器実測図(7)【3本並行沈綴文】	49
第12図 N層～V層遺構位置図	17	第55図 7A類土器分布図(3)	50
第13図 V層遺構配置図及び周辺遺物垂直分布図	18	第56図 7A類土器実測図(8)【4本並行沈綴文】	51
第14図 V層遺構実測図	18	第57図 7A類土器実測図(9)【4本並行沈綴文】	52
第15図 1類土器分布図	19	第58図 7A類土器実測図(10)【4本並行沈綴文】	53
第16図 1A類土器実測図	20	第59図 7A類土器実測図(11)【4本並行沈綴文】	54
第17図 1B類土器実測図	20	第60図 7A類土器分布団(4)	56
第18図 2類土器実測図	21	第61図 7A類土器実測図(12)【5本以上並行沈綴文】	57
第19図 2類土器分布団	21	第62図 7A類土器実測図(13)【5本以上並行沈綴文】	58
第20図 3類土器実測図	22	第63図 7A類土器実測図(14)【5本以上並行沈綴文】	59
第21図 3類土器分布団	22	第64図 7A類土器分布団(5)	61
第22図 V層石器分布図	23	第65図 7A類土器実測図(15)【本数不明二枚貝】	62
第23図 V層出土石器実測図	24	第66図 7A類土器実測図(16)【本数不明二枚貝】	63
第24図 4類土器実測図	25	第67図 7A類土器実測図(17)【本数不明二枚貝】	64
第25図 4類土器分布団	25	第68図 7A類土器実測図(18)【本数不明半截贝】	65
第26図 5類土器分布団	26	第69図 7A類土器実測図(19)【本数不明施伏工】	66
第27図 5類土器位置図	26	第70図 7B類土器分布団(1)	67
第28図 5類土器実測図(1)	27	第71図 7B類土器実測図(1)【2本並行沈綴文】	68
第29図 5類土器実測図(2)	27	第72図 7B類土器分布団(2)	69
第30図 5類土器配置図(2)	28	第73図 7B類土器実測図(2)【3本並行沈綴文】	70
第31図 5類土器実測図(3)	28	第74図 7B類土器実測図(3)【3本並行沈綴文】	71
第32図 5類土器配置図(3)	29	第75図 7B類土器実測図(4)【3本並行沈綴文】	72
第33図 5類土器実測図(4)	29	第76図 7B類土器実測図(5)【3本並行沈綴文】	73
第34図 5類～14類土器分布団	31	第77図 7B類土器実測図(6)【3本並行沈綴文】	74
第35図 5類土器分布団	31	第78図 7B類土器分布団(3)	76
第36図 5類土器実測図(1)	32	第79図 7B類土器実測図(7)【4本並行沈綴文】	77
第37図 5類土器実測図(2)	33	第80図 7B類土器実測図(8)【4本並行沈綴文】	78
第38図 5類土器実測図(3)	34	第81図 7B類土器実測図(9)【4本並行沈綴文】	79
第39図 5類土器実測図(4)	35	第82図 7B類土器分布団(4)	81
第40図 5類土器実測図(5)	36	第83図 7B類土器実測図(10)【5本以上並行沈綴文】	82
第41図 5類土器実測図(6)	37	第84図 7B類土器実測図(11)【5本以上並行沈綴文】	83
第42図 5類土器実測図(7)	38	第85図 7B類土器実測図(12)【5本以上並行沈綴文】	84
第43図 6類土器実測図	40	第86図 7B類土器実測図(13)【5本以上並行沈綴文】	85

挿 図 目 次

第87回	7 B類土器実測図 (14) 【5本以上並行沈縫文5】	87	第155回	突起・把手等分布図	151
第88回	7 B類土器実測図 (15) 【5本以上並行沈縫文6】	88	第156回	突起・把手等実測図	152
第89回	7 B類土器実測図 (16) 【5本以上並行沈縫文7】	89	第157回	円錐状土器品分布図	153
第90回	7 B類土器部分図 (5)	90	第158回	円錐状土器品実測図 (1)	153
第91回	7 B類土器実測図 (17) 【並行沈縫文本数不明 1】	91	第159回	円錐状土器品実測図 (2)	154
第92回	7 B類土器実測図 (18) 【並行沈縫文本数不明 2】	92	第160回	底部分割図	156
第93回	7 B類土器実測図 (19) 【並行沈縫文本数不明 3】	93	第161回	底部実測図 (1)	157
第94回	8 頸土器実測図	94	第162回	底部実測図 (2)	157
第95回	8 頸土器分布図	95	第163回	底部実測図 (3)	158
第96回	9 頸土器分布図	97	第164回	底部実測図 (4)	158
第97回	9 A類土器分布図	97	第165回	底部実測図 (5)	158
第98回	9 A類土器実測図 (1)	98	第166回	底部実測図 (6)	159
第99回	9 A類土器実測図 (2)	99	第167回	底部実測図 (7)	160
第100回	9 A類土器実測図 (3)	100	第168回	底部実測図 (8)	161
第101回	9 A類土器実測図 (4)	101	第169回	底部実測図 (9)	162
第102回	9 B類土器分布図	102	第170回	底部実測図 (10)	162
第103回	9 B類土器実測図 (1)	103	第171回	底部実測図 (11)	163
第104回	9 B類土器実測図 (2)	104	第172回	底部実測図 (12)	164
第105回	9 B類土器実測図 (3)	105	第173回	底部実測図 (13)	165
第106回	9 B類土器実測図 (4)	106	第174回	底部実測図 (14)	166
第107回	9 B類土器実測図 (5)	107	第175回	底部実測図 (15)	166
第108回	9 C類土器分布図	108	第176回	底部実測図 (16)	166
第109回	9 C類土器実測図 (1)	109	第177回	14類土器分布図	167
第110回	9 C類土器実測図 (2)	110	第178回	14類土器実測図 (1)	168
第111回	10 A類土器分布図	112	第179回	14類土器実測図 (2)	169
第112回	10 A類土器実測図 (1)	113	第180回	三層石器層状図	170
第113回	10 A類土器実測図 (2)	114	第181回	第1エリア石器分布図	171
第114回	10 A類土器実測図 (3)	115	第182回	第1エリア石器実測図 (1)	171
第115回	10 B類土器分布図	116	第183回	第1エリア石器実測図 (2)	172
第116回	10 C類土器分布図	117	第184回	第1エリア石器実測図 (3)	173
第117回	10 D類土器実測図	118	第185回	第1エリア石器実測図 (4)	174
第118回	10 C類土器実測図	118	第186回	第2エリア石器分布図	175
第119回	11上類土器分布図	119	第187回	第2エリア石器実測図 (1)	176
第120回	11A類土器分布図	120	第188回	第2エリア石器実測図 (2)	177
第121回	11B類土器分布図	120	第189回	第3エリア石器分布図	177
第122回	11A類土器実測図 (1) 【瓶形文】	121	第190回	第3エリア石器実測図 (1)	178
第123回	11A類土器実測図 (2) 【瓶形文】	122	第191回	第3エリア石器実測図 (2)	180
第124回	11B類土器実測図 (1) 【胸形文】	122	第192回	第3エリア石器分布図	181
第125回	11B類土器実測図 (2) 【胸形文】	123	第193回	第3エリア石器実測図 (4)	182
第126回	11B類土器実測図 (3) 【胸形文】	124	第194回	第3エリア石器実測図 (5)	183
第127回	11B類土器実測図 (4) 【胸形文】	125	第195回	第3エリア石器実測図 (6)	184
第128回	11C類土器分布図	127	第196回	第4エリア石器分布図	185
第129回	11D類土器分布図	127	第197回	第4エリア石器実測図 (1)	185
第130回	11C類土器実測図 (1) 【人形文】	128	第198回	第4エリア石器実測図 (2)	186
第131回	11C類土器実測図 (2) 【人形文】	129	第199回	第4エリア石器実測図 (3)	186
第132回	11D類土器実測図 (1) 【菱形文・三角形文1】	130	第200回	第5エリア石器分布図	187
第133回	11D類土器実測図 (2) 【菱形文・三角形文2】	131	第201回	第5エリア石器実測図 (1)	187
第134回	11D類土器実測図 (3) 【菱形文・三角形文3】	132	第202回	第5エリア石器実測図 (2)	187
第135回	11E類土器分布図	133	第203回	第5エリア石器実測図 (3)	188
第136回	11E類土器実測図 【5字の変形文】	134	第204回	第6エリア石器分布図	189
第137回	11F類土器分布図	135	第205回	第6エリア石器実測図 (1)	189
第138回	11F類土器実測図 (1) 【逆行沈縫文】	136	第206回	第6エリア石器実測図 (2)	190
第139回	11F類土器実測図 (2) 【逆行沈縫文】	137	第207回	第6エリア石器実測図 (3)	192
第140回	11F類土器実測図 (3) 【逆行沈縫文】	138	第208回	第6エリア石器実測図 (4)	193
第141回	11F類土器実測図 (4) 【逆行沈縫文】	139	第209回	第6エリア石器実測図 (5)	195
第142回	11F類土器実測図 (5) 【逆行沈縫文】	140	第210回	第6エリア石器実測図 (6)	196
第143回	11G類土器実測図 【一枚貝殻縫刺文】	141	第211回	第6エリア石器実測図 (7)	197
第144回	11G類土器分布図	142	第212回	第6エリア石器実測図 (8)	198
第145回	12A類土器分布図	143	第213回	第6エリア石器実測図 (9)	199
第146回	12B類土器分布図	143	第214回	第6エリア石器実測図 (10)	200
第147回	12A類土器実測図	144	第215回	エリア石器実測図 (1)	201
第148回	12B類土器実測図 (1)	145	第216回	エリア石器実測図 (2)	202
第149回	12B類土器実測図 (2)	146	第217回	5層土器分布図	203
第150回	12B類土器実測図 (3)	147	第218回	5層土器実測図	204
第151回	12B類土器実測図 (4)	148	第219回	古代～中世遺物分布図	205
第152回	12B類土器実測図 (5)	149	第220回	古代～中世遺物実測図	206
第153回	13B類土器実測図	150	第221回	野原原跡B地点グリッド配置図	207
第154回	13B類土器分布図	150	第222回	野原原跡B地點基本土層図	208

挿 図 目 次

第223図	鳴野原道路B 地点上層断面図(1) ······	209	第253図	石器実測図(4) ······	236
第224図	鳴野原道路D 地点上層断面図(2) ······	210	第254図	石器実測図(5) ······	237
第225図	鳴野原道路D 地点上層断面図(3) ······	211	第255図	石器実測図(6) ······	238
第226図	遺構位置図 ······	213	第256図	石器実測図(7) ······	240
第227図	第1エリア遺構配置図 ······	213	第257図	石器実測図(8) ······	241
第228図	第1エリア遺構実測図(1) ······	214	第258図	石器実測図(9) ······	242
第229図	第1エリア遺構実測図(2) ······	215	第259図	石器実測図(10) ······	243
第230図	第2エリア遺構配置図 ······	216	第260図	石器実測図(11) ······	244
第231図	第2エリア遺構実測図(1) ······	216	第261図	(参考) 墓年較正年代グラフ ······	246
第232図	第2エリア遺構実測図(2) ······	217	第262図	黒曜石原産地 ······	252
第233図	第2エリア遺構実測図(3) ······	218	第263図	安山岩(サマタイト) 原産地 ······	252
第234図	第3エリア遺構配置図 ······	219	第264図	宮ノ上遺跡土器分布図及びエリア区分図 ······	264
第235図	第3エリア遺構実測図 ······	219	第265図	宮ノ上遺跡縄文時代後期前半の各型式と開通する類似縄文土器 ······	267
第236図	第4エリア遺構配置図 ······	220	第266図	縄文時代後期前半土器分布図 ······	268
第237図	第4エリア遺構実測図(1) ······	220	第267図	豊形土器縄文分布抵触過程図 ······	270
第238図	第4エリア遺構実測図(2) ······	221	第268図	豊形土器破片展開図及び縦片化類位 ······	270
第239図	第4エリア遺構実測図(3) ······	222	第269図	省内出土の豊形土器製品 ······	272
第240図	第5エリア遺構配置図 ······	223			
第241図	第5エリア遺構実測図 ······	223			
第242図	土器分布図 ······	224			
第243図	1類および2類土器実測図 ······	224			
第244図	3類土器実測図(1) ······	225			
第245図	3類土器実測図(2) ······	227			
第246図	3類土器実測図(3) ······	228			
第247図	豊形土器および耳朶状土器製品実測図 ······	229			
第248図	4類土器実測図 ······	230			
第249図	石器分布図 ······	231			
第250図	石器実測図(1) ······	233			
第251図	石器実測図(2) ······	234			
第252図	石器実測図(3) ······	235			

表 目 次

第1表	周辺地形地名表 ······	7	第37表	8類土器複数表 ······	95
第2表	宮ノ上道路基準坑座標一覧表 ······	9	第38表	9類土器複数表(1) ······	102
第3表	宮ノ上道路土器勘定分類基準 ······	16	第39表	9類土器複数表(2) ······	110
第4表	宮ノ上道路石材分類基準 ······	16	第40表	9類土器複数表(3) ······	110
第5表	1類土器複数表(1) ······	20	第41表	9類土器複数表(4) ······	111
第6表	1類土器複数表(2) ······	20	第42表	9類土器複数表(5) ······	111
第7表	1類土器複数表(3) ······	21	第43表	10A類土器複数表(1) ······	115
第8表	2類土器複数表 ······	22	第44表	10A類土器複数表(2) ······	115
第9表	3類土器複数表 ······	22	第45表	10A類土器複数表(3) ······	116
第10表	V帶石器複数表 ······	24	第46表	10B類土器複数表 ······	117
第11表	4類土器複数表 ······	25	第47表	10C類土器複数表 ······	117
第12表	5類土器複数表(1) ······	36	第48表	11類土器複数表(1) ······	126
第13表	5類土器複数表(2) ······	39	第49表	11類土器複数表(2) ······	126
第14表	5類土器複数表(3) ······	39	第50表	11類土器複数表(3) ······	129
第15表	6類土器複数表 ······	40	第51表	11類土器複数表(4) ······	129
第16表	7類土器複数表(1) ······	41	第52表	11類土器複数表(5) ······	130
第17表	7類土器複数表(2) ······	41	第53表	11類土器複数表(6) ······	130
第18表	7類土器複数表(3) ······	48	第54表	11類土器複数表(7) ······	133
第19表	7類土器複数表(4) ······	49	第55表	11類土器複数表(8) ······	140
第20表	7類土器複数表(5) ······	49	第56表	11類土器複数表(9) ······	140
第21表	7類土器複数表(6) ······	55	第57表	11類土器複数表(10) ······	141
第22表	7類土器複数表(7) ······	60	第58表	11類土器複数表(11) ······	141
第23表	7類土器複数表(8) ······	60	第59表	12類土器複数表(1) ······	145
第24表	7類土器複数表(9) ······	61	第60表	12類土器複数表(2) ······	145
第25表	7類土器複数表(10) ······	64	第61表	12類土器複数表(3) ······	149
第26表	7類土器複数表(11) ······	64	第62表	12類土器複数表(4) ······	149
第27表	7類土器複数表(12) ······	67	第63表	13類土器複数表 ······	150
第28表	7類土器複数表(13) ······	75	第64表	突起・把手等複数表(1) ······	152
第29表	7類土器複数表(14) ······	75	第65表	突起・把手等複数表(2) ······	152
第30表	7類土器複数表(15) ······	80	第66表	円盤状土器類複数表(1) ······	154
第31表	7類土器複数表(16) ······	80	第67表	円盤状土器類複数表(2) ······	155
第32表	7類土器複数表(17) ······	86	第68表	円盤状土器類複数表(3) ······	155
第33表	7類土器複数表(18) ······	86	第69表	底部複数表(1) ······	157
第34表	7類土器複数表(19) ······	90	第70表	底部複数表(2) ······	157
第35表	7類土器複数表(20) ······	94	第71表	底部複数表(3) ······	162
第36表	7類土器複数表(21) ······	94	第72表	底部複数表(4) ······	162

表 目 次

第73表 底部観察表（5）	163	第106表 分析結果一覧表	246
第74表 底部観察表（6）	163	第107表 各黒曜石の原産地における	
第75表 底部観察表（7）	165	原石群の元素比の平均値と標準偏差値（1）	253
第76表 底部観察表（8）	165	第108表 各黒曜石の原産地における	
第77表 底部観察表（9）	166	原石群の元素比の平均値と標準偏差値（2）	254
第78表 底部観察表（10）	166	第109表 各黒曜石の原産地における	
第79表 14類土器観察表（1）	167	原石群の元素比の平均値と標準偏差値（3）	255
第80表 14類土器観察表（2）	169	第110表 黒曜石製造物群の元素比の平均値と標準偏差値（1）	256
第81表 Ⅲ層石器組成表	170	第111表 黒曜石製造物群の元素比の平均値と標準偏差値（2）	257
第82表 第1エリア出土石器観察表	175	第112表 九州西北地域原産地採取原石が	
第83表 第2エリア出土石器観察表	176	各原石群に同定される割合の百分率%	257
第84表 第3エリア出土石器観察表（1）	182	第113表 各サメカイト（安山岩）の原産地における	
第85表 第3エリア出土石器観察表（2）	184	原石群の元素比の平均値と標準偏差値（1）	258
第86表 第4エリア出土石器観察表	185	第114表 各サメカイト（安山岩）の原産地における	
第87表 第5エリア出土石器観察表	189	原石群の元素比の平均値と標準偏差値（2）	259
第88表 第6エリア出土石器観察表（1）	191	第115表 原石産地不明の組成の似たサメカイト（安山岩）製造物で作られた	
第89表 第6エリア出土石器観察表（2）	194	遺物群の元素比の平均値と標準偏差値（1）	259
第90表 第6エリア出土石器観察表（3）	201	第116表 原石産地不明の組成の似たサメカイト（安山岩）製造物で作られた	
第91表 エリア外出土石器観察表	202	遺物群の元素比の平均値と標準偏差値（2）	260
第92表 15類土器観察表	203	第117表 宮ノ上道路及び鳴野原道路B地点出土黒曜石製石器の	
第93表 古代～中世遺物観察表	206	元素比分析結果	261
第94表 鳴野原道路B地点基準坑頭標一覧表	207	第118表 鳴野原道路B地点出土安山岩製剥片風化面（粗面波洗浄のみ）の	
第95表 鳴野原道路B地点土器始土分類基準	212	元素比分析結果	261
第96表 鳴野原道路B地点石材分類基準	212	第119表 鳴野原道路B地点出土安山岩製剥片新鮮面（ニアブラン処理後）の	
第97表 土器観察表（1）	228	元素比分析結果	261
第98表 土器観察表（2）	228	第120表 宮ノ上道路及び鳴野原道路B地点出土黒曜石製石器の	
第99表 土器観察表（3）	230	原材料産地分析結果	262
第100表 土器観察表（4）	230	第121表 鳴野原道路B地点出土安山岩製剥片の原材料産地分析結果	262
第101表 石器組成表	232	第122表 各類型のエリア別出土点数（宮ノ上道路）	263
第102表 石器観察表（1）	236	第123表 各エリアの分類別出土点数（宮ノ上道路）	264
第103表 石器観察表（2）	239	第124表 各類型の地層別出土点数（宮ノ上道路）	265
第104表 石器観察表（3）	243	第125表 岩内出土の耳朶状土器製品一覧表	271
第105表 分析試料一覧表	246		

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るために、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（加世田土木事務所：現南薩地域振興局建設部；以下、道路建設課という）は、主要地方道鹿児島川辺線地高規格道路南薩縦貫道「川辺道路」を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育文化財課（以下、文化財課という）に照会した。これを受けた文化財課は分布調査を行い、事業区内に山神迫遺跡、折戸平遺跡、宮ノ上遺跡、堂園遺跡、鳴野原遺跡、古殿諏訪陣跡、馬場田遺跡等が所在することが判明した。遺跡の総面積は79,600m²が想定された。

この結果を受けて、道路建設課、文化財課、埋蔵文化財センターで協議した結果、上記の遺跡の範囲と性格を把握するために確認調査を実施することとした。調査は埋蔵文化財センターが行うこととした。

なお、馬場田遺跡に関しては、事業区域が町道拡幅工事と重なることから、川辺町（現南九州市）教育委員会が確認調査等を行うこととした。

確認調査の結果、宮ノ上遺跡は約2,000m²の範囲に縄文時代と旧石器時代の包含層が残存することが確認され、鳴野原遺跡についても14,000m²の範囲に包含層の存在が確認された。確認調査の結果を受け、道路建設課・文化財課・埋蔵文化財センターは再度協議し、現状保存や設計変更が不可能であることから、記録保存のための本調査を実施することになった。

第2節 事前調査

1 分布調査

（1）調査概要

分布調査は埋蔵文化財センターが平成13年度に実施した。その結果、周知の遺跡として知られていた宮ノ上遺跡、鳴野原遺跡のほかに、山神迫遺跡、折戸平遺跡、堂園遺跡、古殿諏訪陣跡、馬場田遺跡の5遺跡が確認され、遺跡の総面積は79,600m²が想定された。

2 確認調査

（1）調査概要

確認調査は平成16年2月3日から2月26日まで実施し、埋蔵文化財センターが担当した。調査の結果、包含層の残存が確認できなかった山神迫遺跡を除く6遺跡で、合計26,500m²の範囲に包含層が残存していることが確認された。このうち宮ノ上遺跡では、約2,000m²の範囲に縄文時代と旧石器時代の包含層が残存することが確認され、

鳴野原遺跡についても約14,000m²の範囲に縄文時代の包含層を確認した。なお、鳴野原遺跡については、遺構・遺物の確認された地域が字大堀と陣の2地域に区分されることが判明し、それぞれA地点・B地点とした。

（2）調査体制

確認調査（平成15年度）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 （加世田土木事務所）
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長	木原 俊孝
調査企画	次長兼総務課長 田中 文雄
	調査課長兼南の縄文調査室長
	新東 晃一
調査課長補佐	池畠 耕一
主任文化財主事兼第一調査係長	中村 耕治
調査担当	主任文化財主事 中村 耕治
	文化財主事 元田 順子
	岩戸 孝夫
	吉岡 康弘
	石原田 高広
事務担当	総務係長 平野 浩二
	主 事 福山恵一郎

3 調査の経過（日誌抄より）

確認調査（平成15年度）

平成16年2月3日（火）～平成16年2月26日（木）

1～7トレチ設定、掘り下げ

ピット検出状況写真撮影、実測

遺物取り上げ、遺物出土状況写真・完掘写真撮影

土層断面図、トレチ配置図作成

第3節 本調査

1 調査概要

本調査は平成16年度から平成18年度にかけて実施した。平成16年度には平成16年5月10日から平成17年3月18日までの期間で、宮ノ上遺跡、古殿諏訪陣跡、堂園遺跡A地点、折戸平遺跡、鳴野原遺跡B地点の5遺跡・12,900m²を対象に実施し、古殿諏訪陣跡・折戸平遺跡については調査を完了した。

平成17年度は平成17年6月1日から平成18年3月20日まで宮ノ上遺跡、堂園遺跡A地点、堂園遺跡B地点、鳴野原遺跡B地点の4遺跡16,476m²を対象に調査を実施し、宮ノ上遺跡、堂園遺跡A地点の調査を完了した。

平成18年度は平成18年5月22日から平成19年3月20日までに堂園遺跡B地点と鳴野原遺跡B地点の2遺跡について調査を実施し、堂園遺跡B地点の調査を完了した。

本調査では、労務管理、調査の一部、測量、発掘資材の一部調達について、埋文センターと交わした覚書に基づき、土木部が新和技術コンサルタント株式会社へ委託し、埋文センターの指導の下、発掘調査を実施した。

なお、鳴野原遺跡B地点については平成22年7月に文化財課で試掘調査を行った。この調査で遺構・遺物は確認されず、この結果をもって鳴野原遺跡B地点についても調査を完了した。

2 調査体制

(1) 平成16年度

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
(加世田土木事務所)

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 木原 優孝
次長兼総務課長 賞雅 彰

調査課長 兼南の縄文調査室長

新東 晃一

調査課長補佐 立神 次郎

主任文化財主事 兼第一調査係長

池畠 耕一

調査担当 文化財主事 日高 正人
タ 森 雄二

事務担当 総務係長 平野 浩二
主事 福山恵一郎

調査指導

鹿児島大学法文学部助教授 本田 道輝
東京大学大学院人文社会研究科助手 安斎 正人

(2) 平成17年度

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
(加世田土木事務所)

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 上今 常雄
次長兼総務課長 有川 昭人

次長兼第一調査係長

南の縄文調査室長 新東 晃一

主任文化財主事 兼第一調査係長

兼南の縄文調査室長補佐 池畠 耕一

主任文化財主事 中村 耕治

調査担当 文化財主事 八木澤一郎

タ 石原田高広

事務担当 総務係長 平野 浩二

主　　査

寄井田正秀

調査指導

文化庁美術学芸課考古資料部門文化財調査官

原田 昌幸

鹿児島大学法文学部助教授

本田 道輝

西南学院大学文学部教授

高倉 肇彰

(3) 平成18年度

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課

(加世田土木事務所)

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 上今 常雄

(～平成18年7月31日)

所長 宮原 景信

(平成18年8月1日～)

調査企画

次長兼総務課長 有川 昭人

次長兼南の縄文調査室長 新東 晃一

調査第一課長 池畠 耕一

主任文化財主事 兼

調査第一課第一調査係長 兼 南の縄文調査室長補佐 長野 滉一

調査担当 文化財主事 兼 八木澤一郎

タ 久保田昭二

新和技術コンサルタント株式会社

調査担当 文化財主事 寄井田正秀

蒲地 俊一

事務担当 総務係長 主査 本田 道輝

調査指導 徳島文理大学教授 石野 博信

鹿児島大学法文学部助教授 本田 道輝

(4) 平成22年度（試掘調査）

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課

(南薩地域振興局)

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査担当 鹿児島県教育庁文化財課

文化財主事 川口 雅之

調査協力 南九州市教育委員会文化財課

主任主査 上田 耕

主査 若松 重弘

立会者 南薩地域振興局建設部

第二係長 駆之内 翠

3 調査の経過

(1) 宮ノ上遺跡

本調査は平成16年5月10日～平成16年8月27日、平成17年1月12日～平成17年3月18日、平成17年6月1日～平成17年9月27日の3次にわたって行われた。平成16年度の調査では、8月に新たに旧石器時代の包含層が複数発見され、包含層が調査区外に延びるために改めて用地

交渉等を行う必要が生じ、調査を一時中断した。旧石器時代の発掘調査は、用地交渉の結果を受けて平成17年2月に再開し、平成17年度まで実施した。調査の経緯は日誌抄をもって省略する。

(日誌抄)

平成16年度

平成16年5月10日（月）～平成16年5月28日（金）

表土剥ぎ、II層～III層掘り下げ、遺物取り上げ。

平成16年6月1日（火）～平成16年6月29日（火）

II層～III層掘り下げ、遺物取り上げ。

平成16年7月1日（木）～平成16年7月30日（金）

III層～V層掘り下げ、遺構実測、遺物取り上げ。

平成16年8月3日（火）～平成16年8月27日（金）

VI層～VII層掘り下げ、B,C-4～9区土坑検出。

C-7～12区土層断面実測、出土遺物取り上げ。

B,C-7～12区地形図作成、礫群実測、石器製作跡検出。

平成17年1月12日（月）～平成17年2月25日（金）

VII層～IX層掘り下げ、各ブロック遺物取り上げ。

平成17年3月1日（火）～平成17年3月18日（金）

IX層掘り下げ、ブロック検出状況写真撮影。

石核集中部実測、遺物取り上げ、埋め戻し準備。

平成17年度

平成17年6月1日（水）～平成17年6月28日（火）

調査準備、被覆土の剥ぎ取り、2mメッシュ釘打ち。

IX層～X層掘り下げ、X,I層上面地形図作成。

遺構等実測、下層確認。

平成17年7月1日（金）～平成17年7月28日（木）

IX層～X,I層掘り下げ、遺物取り上げ。

シルト質頁岩ブロック実測、礫群実測・写真撮影。

ブロック下石核群実測・写真撮影、地形図測量。

平成17年8月2日（火）～平成17年8月26日（金）

IX層～X,I層掘り下げ、遺物取り上げ。

IX層ブロック実測。

X,I層上面高線測量、礫群実測・写真撮影。

平成17年9月1日（木）～平成17年9月27日（火）

X,I層～X,I層掘り下げ、遺物取り上げ。

礫群実測・写真撮影、X,II層上面地形図測量。

調査終了準備。

(2) 喚野原遺跡B地点

本調査は平成17年2月18日～平成17年3月15日、平成17年5月24日～平成18年3月16日、平成18年11月1日～平成19年2月20日の3次にわたって行われた。なお、喚野原遺跡B地点については平成18年度の本調査終了後、調査未了部分について試掘調査を行った結果包含層が確認されず、この調査をもって調査終了となった。

調査の経緯は日誌抄をもって省略する。

(日誌抄)

平成16年度

平成17年2月18日（金）～平成17年3月15日（火）

調査区環境整備、表土重機剥ぎ取り。

横杭打ち、グリッド杭設定。

平成17年度

平成17年5月24日（火）～平成17年5月27日（金）

表土剥ぎ、プレハブ設置、環境整備。

現地協議（加世田土木事務所、埋七）。

平成17年6月1日（水）～平成17年6月13日（月）

機材等設置、環境整備。

遺構精査・遺構認定・掘り下げ。

平成17年7月4日（月）～平成17年8月18日（木）

環境整備。

平成17年9月15日（木）～平成17年9月28日（水）

重機掘り下げ、IV層上面遺構精査。

IV層掘り下げ、セクションベルト精査。

遺物出土状況写真撮影、遺物取り上げ。

IV層掘り下げ、遺構検出、写真撮影。

平成17年10月4日（火）～平成17年10月7日（金）

IV～V層掘り下げ、遺物取り上げ。

遺物出土状況写真撮影。

ピット・土坑精査、断面・完掘写真撮影。

炭化物集中区データ取り込み。

下層確認トレレンチ設定・掘り下げ。

IV層上面コンタデータ取り込み。

土坑完掘写真撮影・実測。

遺構検出・写真撮影・実測。

炭化物サンプリング。

平成17年11月1日（火）～平成17年11月28日（月）

IV～V層掘り下げ、遺物取り上げ。

下層確認トレレンチ土層断面写真撮影・実測。

遺構検出・遺物出土状況写真撮影。

遺構実測、土器出土状況実測、炭化物サンプリング。

IV層上面コンタデータ取り込み、図面整理。

平成17年12月1日（木）～平成17年12月27日（火）

V層・下層確認トレレンチ掘り下げ、遺物取り上げ。

遺構精査・掘り下げ、土層断面実測、図面整理。

平成18年1月5日（木）～平成18年1月12日（木）

土層断面実測、遺物取り上げ。

平成18年2月20日（月）～平成18年2月23日（木）

調査範囲設定、表土重機剥ぎ取り。

平成18年3月16日（木）

環境整備。

平成18年度

平成18年11月1日（水）～平成18年11月24日（金）

テント等移設、機材等設置、環境整備。

III層～IV層掘り下げ、遺物取り上げ。

集石等遺構検出・写真撮影・実測。

炭化物集中区データ取り込み。

下層確認トレレンチ設定・掘り下げ。

IV層コンタデータ取り込み。

土層断面写真撮影・実測、図面整理。

平成18年12月4日（月）～平成18年12月14日（木）

セクションベルト掘り下げ、遺物取り上げ。
完掘写真撮影、環境整備、埋め戻し。
VI層上面遺構精査、VI層重機掘り下げ。
遺物取り上げ、環境整備、図面・遺物整理。
平成19年2月19日（月）～平成19年2月20日（火）
航空写真撮影・引き渡し準備。

第4節 報告書作成

1 調査概要

宮ノ上遺跡の報告書作成は平成19年度～21年度、23年度に実施し、旧石器時代の該当部分については、平成22年3月に報告書を刊行した。宮ノ上遺跡の縄文時代以降該当部分と鳴野原遺跡B地点については、本報告により平成24年3月に刊行することとなった。

2 調査体制

(1) 平成19年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 (南薩地域振興局建設部)
調査主体	鹿児島県教育委員会
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	宮原 景信
次長兼総務課長	平山 彰
次長兼南の縄文調査室長	新東 晃一
調査第一課長	池畠 耕一
主任文化財主事兼調査第一課第	
一調査係長兼南の縄文調査室長	
補佐	長野 真一
主任文化財主事兼調査第一課第	
一調査係長兼南の縄文調査室長	
補佐	長野 真一
事務担当	主査 蒲地 俊一

(2) 平成20年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 (南薩地域振興局建設部)
調査主体	鹿児島県教育委員会
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	宮原 景信
次長兼総務課長	平山 彰
次長兼南の縄文調査室長	池畠 耕一
調査第一課長	青崎 和恵
主任文化財主事兼調査第一課第	
一調査係長兼南の縄文調査室長	
補佐	長野 真一
調査第一課長	青崎 和恵
主任文化財主事兼調査第一課第	
一調査係長兼南の縄文調査室長	
補佐	長野 真一
文化財研究員	馬籠 亮道
事務担当	主査 五百路 真
作成指導	小畠 弘己

(3) 平成21年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 (南薩地域振興局建設部)
調査主体	鹿児島県教育委員会
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	山下 吉美
次長兼総務課長	齋藤 守重
次長兼南の縄文調査室長	青崎 和恵
調査第一課長	中村 耕治
主任文化財主事兼調査第一課第	
一調査係長兼南の縄文調査室長	
補佐	井ノ上秀文
作成担当	
主査	井ノ上秀文
文化財研究員	馬籠 亮道
タ	森 幸一郎
事務担当	高崎 智博
作成指導	大阪市文化財協会会長原調査事務所
所長代理	朝川 一徳

(4) 平成23年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 (南薩地域振興局建設部)
調査主体	鹿児島県教育委員会
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	寺田 仁志
次長兼総務課長	田中 明成
次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
調査第一課長	堂込 秀人
文化財主事兼調査第一課	
第二調査係長	大久保浩二
文化財主事	内山 伸明
タ	長野 真一
タ	小林 晋也
タ	馬籠 亮道
事務担当	大園 样子
作成指導	鹿児島国際大学学芸員

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

宮ノ上遺跡は、鹿児島県南九州市川辺町大字古殿字宮ノ上に所在する。

川辺町は薩摩半島のほぼ中央部にあり、西側に東シナ海を望み、東側は錦山等の山塊を境界とし鹿児島市と接している。また、平成19年10月には、近隣の知覧町、頴娃町と合併し、南薩地方の中核都市を目指す南九州市としてスタートした。

本遺跡は、南薩地方最大河川である万之瀬川に流れ込む清水川と神殿川との間の鳴野原台地に位置する。なお、この鳴野原台地上には、堂園遺跡A地点、堂園遺跡B地点(17)、鳴野原遺跡A地点、鳴野原遺跡B地点(18)等の大小の遺跡が存在し、古くから生活条件を満たす良好な環境が形成されていたことを物語っている。

清水川は遺跡の東側を北東から南西方向に走り、溶結凝灰岩や厚く堆積するシラスを深く刻んで段丘崖を形成している。地質構造的には四十万層群を基盤層とし、これらは副産物として石器の材料となる砂岩や頁岩を供給している。加えて、近年の調査では、蛇紋岩の露頭も知られるようになり、縄文時代以降の石器とりわけ磨製石斧の供給源であった可能性が指摘されてきている。その四十万層群の上位を阿多火碎流に起因する溶結凝灰岩が覆い、さらに始良カルデラ起源のシラスが厚く堆積している。そしてこれらの台地は、中小河川の開析により狭小で間延びした南九州特有のヤツデ状の台地を形成している。すなわち、本遺跡の東側を走る清水川が開析した溶結凝灰岩崖に刻まれたのが「清水磨崖仏」である。

第2節 歴史的環境

南九州市川辺町内の先史時代及び古代の遺跡は町内全域に分布し、中でも万之瀬川流域や川を眺望できる台地上には密に分布する。

町内最古の遺跡は、後期旧石器時代のナイフ形石器や台形石器、剥片尖頭器等を出土する津フジ遺跡、背野平遺跡、上桑持野遺跡、萩久保遺跡(9)等があり、背野平遺跡ではA-T層上位から7基の繩張が発見され、24,000年前の生活痕跡を知ることができる。宮ノ上遺跡で主体をなす石器群は旧石器時代後半に属するとみられるが、石材原産地の近傍に位置し原産地遺跡的な性格をもつこと、多量の石器接合資料が得られ石器製作技術やブロック形成過程を具体的に検討可能なことが特に重要である。

縄文時代になると遺跡数も飛躍的に増加し、具体的活動の痕跡を多くの遺跡で見ることが可能となってくる。町内の縄文時代で最も古い縄文時代草創期の遺跡が鷹爪野遺跡で、隆帶土器と共に舟形状配石炉が発見されている。また、その上位では早期の前平式土器が磨製石鐵

と共に8軒の堅穴住居跡を伴って発見されている。小崎遺跡では南下した押型文土器に伴って食糧残滓の貝殻や獸骨が発見され、荒多遺跡・上桑持野遺跡・鳴野原遺跡B地点等では塞ノ神式土器が主体で遺跡を構成している。万之瀬川沿いの廻り淵遺跡や南田代遺跡、古市遺跡からは曾畠式土器や深浦式土器等の縄文時代前期から中期の遺構・遺物が発見され、時代と共に遺跡の立地が変化していく様相を見ることができる。次に、田中堀遺跡からは、指宿式土器や市来式土器が多数出土し、貯蔵穴とみられる土坑も造られている。また、2007年川辺町教育委員会発行の答石遺跡の報告書では後期の御領式土器の存在が報じられ、縄文時代のはば全ての遺跡が存在することが分かる。

弥生時代から古墳時代の遺跡に関しては、万之瀬川や神殿川等の河川流域や流域に直結する台地から発見される傾向がみられる。堂山遺跡では弥生前期の古市遺跡でも同時期の堅穴住居跡が2軒発見されている。弥生中期になると、大型スーパーが進出した寺山遺跡で大規模なV字溝が造られ、万之瀬川を見下ろす台地に環濠集落が存在した可能性が高くなっている。出土品からは、丹塗り土器等の北九州系土器も含まれ、広範な交流の痕跡が読み取れる。そして、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては堂園遺跡B地点で集落が、堂園遺跡A地点では墓が発見され、集落構造と葬制のあり方を具体的に示す良好な事例となっている。さらに堂園遺跡B地点の堅穴住居跡の中には、鍛冶工房と指摘される特殊な建物跡もあり大いに注目される。

古代については、「倭名類聚抄」によると「加波乃郡」と謂じられ河辺郡に属し、権種・川上の二郷があつたとされる。現在の川辺町は、河辺郡川上郷と阿多郡嘉例郷に属していたとされる。

平安時代末期から鎌倉時代中期にかけ、河辺郡は府領社と公領社からなる。地頭は島津忠久が、府領社下司と公領郡司には河辺氏の子孫河辺道綱の名が伝えられる。その後、島津忠良の三州統一化により川辺も直轄地として組み込まれることとなり、平山城・松尾城・山石城等の乱立する諸城がその緊張した時代背景を伝えている。

鹿児島県の史跡に指定されている「清水磨崖仏群」は、清水川の右岸の溶結凝灰岩崖に刻まれている。凝灰岩崖は高さ20mに達し、総延長400m間に192体の梵字・五輪塔・宝鏡印塔が確認され、その造営は平安時代から明治時代の長い間連続と行われたとされる。

旧川辺町は、現在支所等の行政機関が集中する平山地区に中心を置くが、磨崖仏群が造立された創建当初は「岩屋」に、鎌倉期から室町期にかけては清水から古殿・神殿が中心であったと伝えられている。



第1図 周辺遺跡位置図

第3節 鳴野原台地の発掘調査

鳴野原台地及びその周辺では、川辺道路建設に伴い計9遺跡の調査が行われた。

折戸平遺跡（5）、山神追遺跡（3）については確認調査で構造や遺物が発見されなかったため本調査は行われていない。

宮ノ上遺跡（16）は台地から一段上の段丘上に位置し、旧石器時代～縄文時代の遺物が多く出土した。旧石器時代ではナイフ形石器文化期後半期を中心に充実した資料が得られている。縄文時代以降については縄文時代後期前半の土器群を中心とする多量の遺物が出土している。

堂園遺跡（17）は、南北に2つの調査区が設定され、北側をA地点、南側をB地点として調査が行われた。A地点は弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての土坑墓が64基検出され、県内では類例の少ない時期の土坑墓群として注目される。B地点は弥生時代～古墳時代の堅穴住居跡が25軒検出され、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての集落跡が発見されたことが注目される。この中には南九州特有の花弁形住居が12軒含まれる。從来、花弁形住居は薩摩半島では検出例が少なかったが、

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	平野上	川辺町御所の野上	台地	古墳	成田式	
2	山岸下	川辺町御所の神下	台地	古墳	成田式	
3	山岸前	川辺町御所の神前	台地	古墳	成田式	
4	上五田田	川辺町御所の五田田	台地	古墳	成田式	
5	前戸平	川辺町御所の戸平	台地	縄文	縄文土器	
6	高船	川辺町御所の高船	台地	弥生	弥生土器片数多く	田名「上ノ段中浜」「地ノ目」を保有
7	高船山頂	川辺町御所の高船山頂	山頂稜斜面	縄文(早形)	縄文土器	
8	内青原	川辺町御所の内青原	台地	古墳	成田式	
9	前久保	川辺町御所の久保	台地	石跡(遺文・早期)	ナメコ形石器・筒形土器・折平式・石器式	
10	中ノ平	川辺町御所の中ノ平	台地	古墳	成田式	
11	内青原の城跡	川辺町御所の内青原	台地	平安～中世	アーチ形石器・筒形土器	
12	上ノ原	川辺町御所の上ノ原	台地	古墳	成田式	
13	神原の上	川辺町御所の神原の上	台地	古墳	成田式	
14	法勝原	川辺町御所の法勝原	台地	縄文・弥生	弥生土器	
15	大庭	川辺町御所の大庭	山腹	縄文	土器・筒形土器	消失
16	宮ノ上	川辺町御所宮ノ上	丘陵	堅穴住居・縄文早形・縄文中期	アーチ形石器・筒形土器・折平式・石器式	調査令(146)、本報告書
17	宝庭	川辺町御所	台地	縄文(中紀・後期)・弥生(後期)・古墳・中世	彫刻・象形・筒形土器・筒形・筒形・筒形・筒形・筒形・筒形	調査令(168)、調査令(123)
18	堀野原の跡野原	川辺町御所の跡野原	台地	縄文(早期)	石器・土器・筒形土器	調査令(47)、調査令(156)、本報告書
19	中原	川辺町御所の中原	台地	古墳	成田式	
20	横堤	川辺町御所の横堤	台地	古墳	成田式	
21	高瀬	川辺町御所の高瀬	台地	縄文	土器・筒形土器	平成12年調査調査
22	裏高瀬・道	川辺町御所の裏高瀬・道	台地	弥生	土器・筒形土器	
23	尾上	川辺町御所の尾上	台地	弥生	弥生・筒形土器	
24	代田	川辺町御所代田の上	山腹稜斜面	縄文(早形)	折平式	
25	佐集	川辺町御所の佐集	山腹傾斜面	縄文(古墳・古代)	縄文土器・成田式・筒形土器	
26	東・道	川辺町御所の東・道	台地	縄文・古墳		
27	木場田	川辺町御所の木場田	台地	縄文		
28	東側小野	川辺町御所の東側小野	丘陵	縄文(早形)	縄文	
29	東側小野	川辺町御所の東側小野	台地	縄文	縄文(早形)	
30	桟馬場	川辺町御所の桟馬場	台地	古墳・中世(後期)	成田式・青磁・白磁	
31	川辺町御所	川辺町御所の御所	台地	中世	青磁	
32	玉手牛	川辺町御所の牛	山腹稜斜面	中世(後期)～近世	縄石・一括移存	川辺町教育委員会(8)と(3)
33	牛中橋	川辺町御所の牛中橋	台地	平安～中世(後期)	土器・筒形土器	
34	古墳跡跡野原	川辺町御所の古墳跡	台地	古墳・古墳・中世	成田式・土器・筒形・筒形・筒形・筒形・筒形・筒形・筒形・筒形	調査令(106)
35	松葉原跡	川辺町御所の松葉原	丘陵	中世(後期)	空気・筒形	
36	野崎跡	川辺町御所の野崎	台地	中世		
37	高塚原	川辺町御所の高塚原	台地	中世		鹿児島市教育委員会(3)
38	大田原	川辺町御所の大田原	台地	縄文(後期)	青磁式	
39	茅屋	川辺町御所の茅屋	台地	縄文～古墳		
40	野崎跡の尾城跡	川辺町御所の野崎跡	台地	中世		
41	平山跡	川辺町御所の平山	河原段丘	中世・古墳	青磁・筒形	川辺町教育委員会(1)
42	茅地跡	川辺町御所の茅地	山腹稜斜面	中世	空気	
43	野石跡	川辺町御所の野石	山腹稜斜面	中世?	字名	
44	山城跡	川辺町御所の山城跡	山腹稜斜面	古代?		

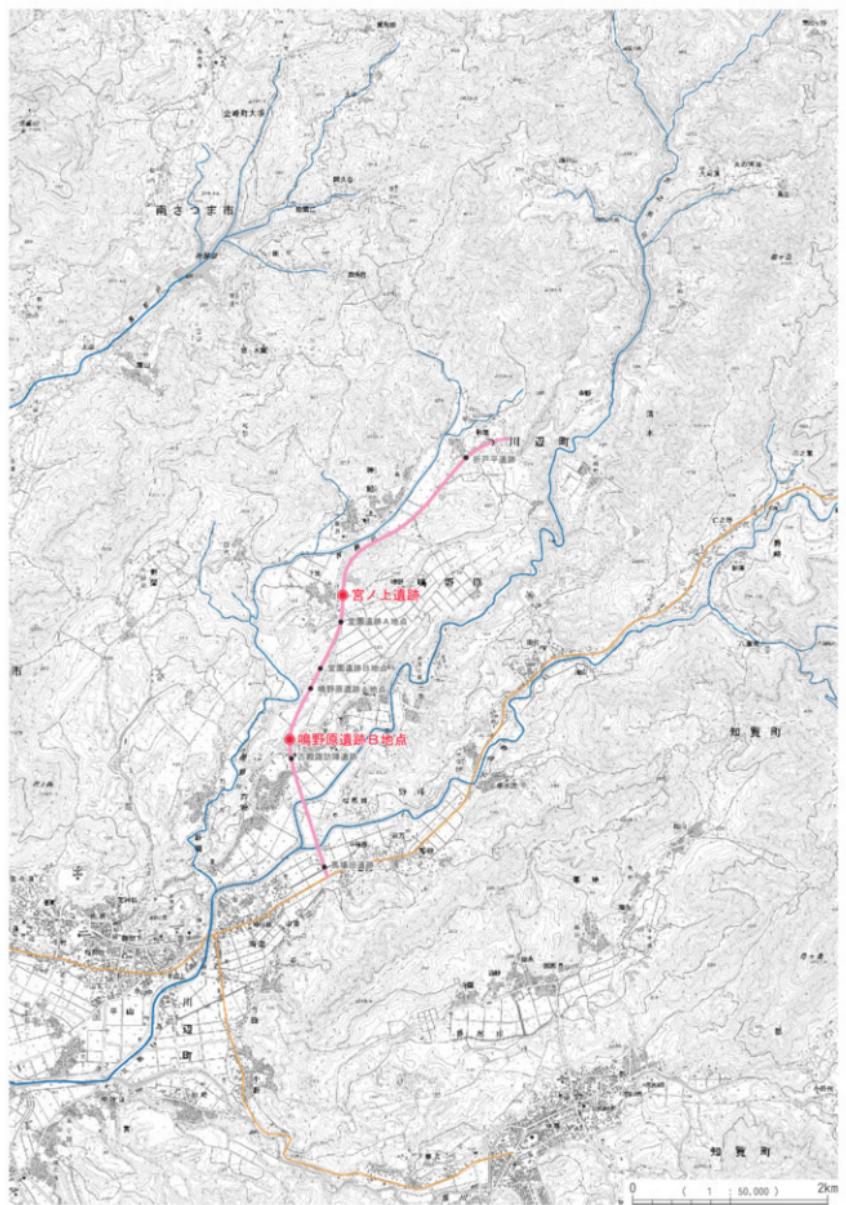
本遺跡例は薩摩半島中部の事例として重要な資料である。

堂園遺跡については、B地点で検出された堅穴住居群と、北に約600m離れたA地点で検出された土坑墓群との関係も重要である。同時期の集落域と墓域が近距離で検出された事例は鹿児島県内では初めてであり、当該域の集落景観を検討する上できわめて重要な資料となる。

鳴野原遺跡（18）は、堂園遺跡の南側に位置する。堂園遺跡同様、A地点とB地点に分かれて発掘調査が行われた。A地点では、古墳時代と縄文時代後期の住居跡が検出され、多量の遺物が出土した。B地点では台地の南縁に近く、縄文時代早期の集石と遺物が出土した。

古殿訪跡陣跡（34）は応永24年9月11日の鳥津豊久と伊集院頼久の合戦の折、伊集院氏が敗走する鳥津氏を追撃するために布陣した地とされている。発掘調査では本陣とされた諭訪神社から西に約50m離れているためが明瞭な遺構は確認されなかった。

低地部に位置する馬場田遺跡（37）は、南九州市教育委員会によって発掘調査が行われた。千窓氏の居館推定地に隣接する区域で、溝状遺構や陶磁器類が多く出土している。



第2図 川辺道路関連遺跡位置図

第Ⅲ章 宮ノ上遺跡の調査概要

第1節 発掘調査の方法

宮ノ上遺跡の本発掘調査は、平成16年度と平成17年度の合計3次にわたって、合計2,000m²を対象として行われた。調査地は鳴野原台地上の神殿下里集落に面する丘陵地の西側斜面に位置し、旧地は山林、果樹園等に利用されていた。

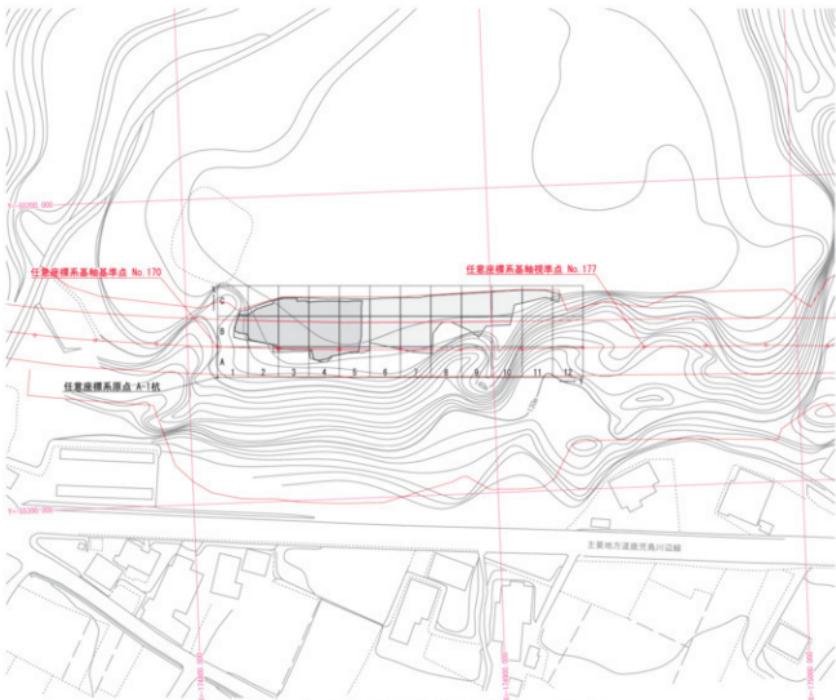
本調査に当たっては、表土を重機で除去した後、10mグリッドを設定してⅢ層以下を人力によって掘り下げた。ただし、包含層が確認されなかった部分や無遺物層については、重機を使用して掘り下げを行った。縄文時代の包含層は概ねV層以上に相当する。

グリッドの設定に当たっては、基本グリッド間隔を10mとし、工事用センター杭No.170を基点に工事用センター杭No.177を規準した線をグリッドの基軸とした。測量座標の取り扱いについては、発掘調査では国土座標によって測量作業が進められたが、本報告書では整理作業の都合上、グリッドに基づく任意座標系に変換した（第

3節参照）。任意座標系はA-1杭を原点として縦軸をX、横軸をYとした。なお、工事用センター杭No.170の国土座標はX=-174809.852,Y=-55248.550であり、変換後の任意座標はX=10,000,Y=0.000である。また、工事用センター杭No.177の国土座標はX=-174949.726,Y=-55254.077であり、変換後の任意座標はX=10,000,Y=139.984である。第3図にはグリッド配置を、第2表に基準杭の座標を示した。

第2表 宮ノ上遺跡基準杭座標一覧表

点名	公測X座標	公測Y座標	任意X座標	任意Y座標	備考
No.170	174809.852	55248.550	10,000	0.000	任意座標系基準原点
No.177	174949.726	55254.077	10,000	139.984	任意座標系基準規準点
A-1	174809.457	55258.542	0,000	0,000	任意座標系原点
A-13	174929.363	55263.280	0,000	120,000	



第3図 宮ノ上遺跡周辺地形およびグリッド配置図

第2節 遺跡の層序

層序については南薩地方の層序と基本的には同様であるが、旧石器時代包含層については、宮ノ上遺跡特有のものである。以下に、各層の特徴を示す。

I層：表土。

II層：黒色土。縄文時代～中世の遺物包含層である。

III層：黄茶褐色火山灰土。6,400年前の鬼界カルデラ起源の火山灰で通称アカホヤと呼称される。宮ノ上遺跡においては、二次堆積中に開闢起源のコラがブロック状に認められたが、どの時代の爆発かは確認できなかった。

IV層：暗褐色硬質土。固く締まった土層である。

V層：黒褐色硬質土。層内にバミスを含む。縄文時代早期の遺物が含まれる。

VI層：黄褐色火山灰土。層の下部は軽石状を呈する。

11,500年前の桜島起源の薩摩火山灰層に比定される。

VII層：暗赤褐色土。旧石器時代～縄文時代草創期の遺物包含層である。

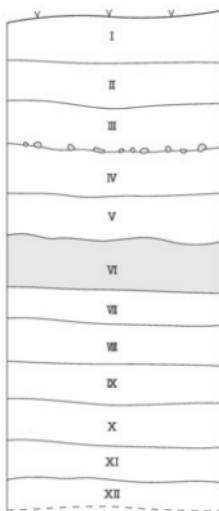
VIII層：暗茶褐色粘質土。旧石器時代の遺物包含層である。

IX層：褐色シルト質土。旧石器時代の石器製作跡が検出された。

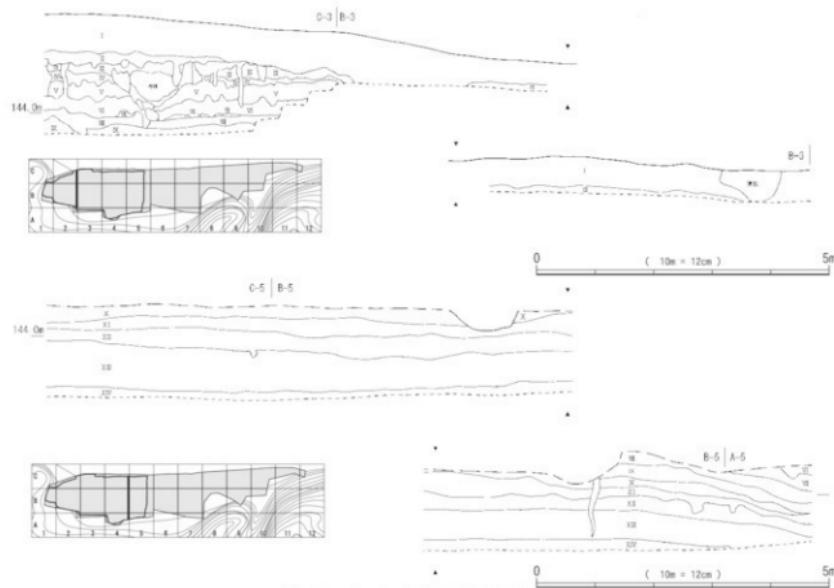
X層：にぶい赤褐色粘質土。

XI層：にぶい赤褐色シルト質土。

XII層：燈籠色軽石混じりシルト質土。

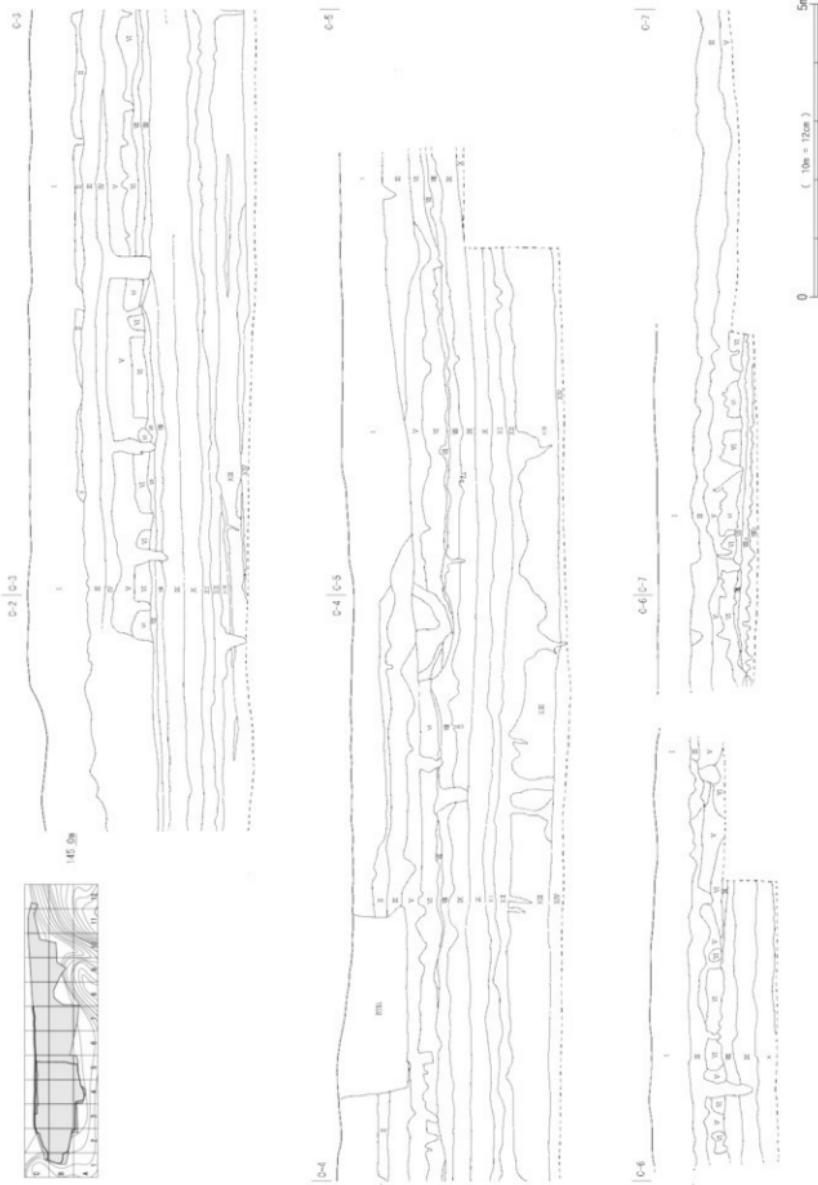


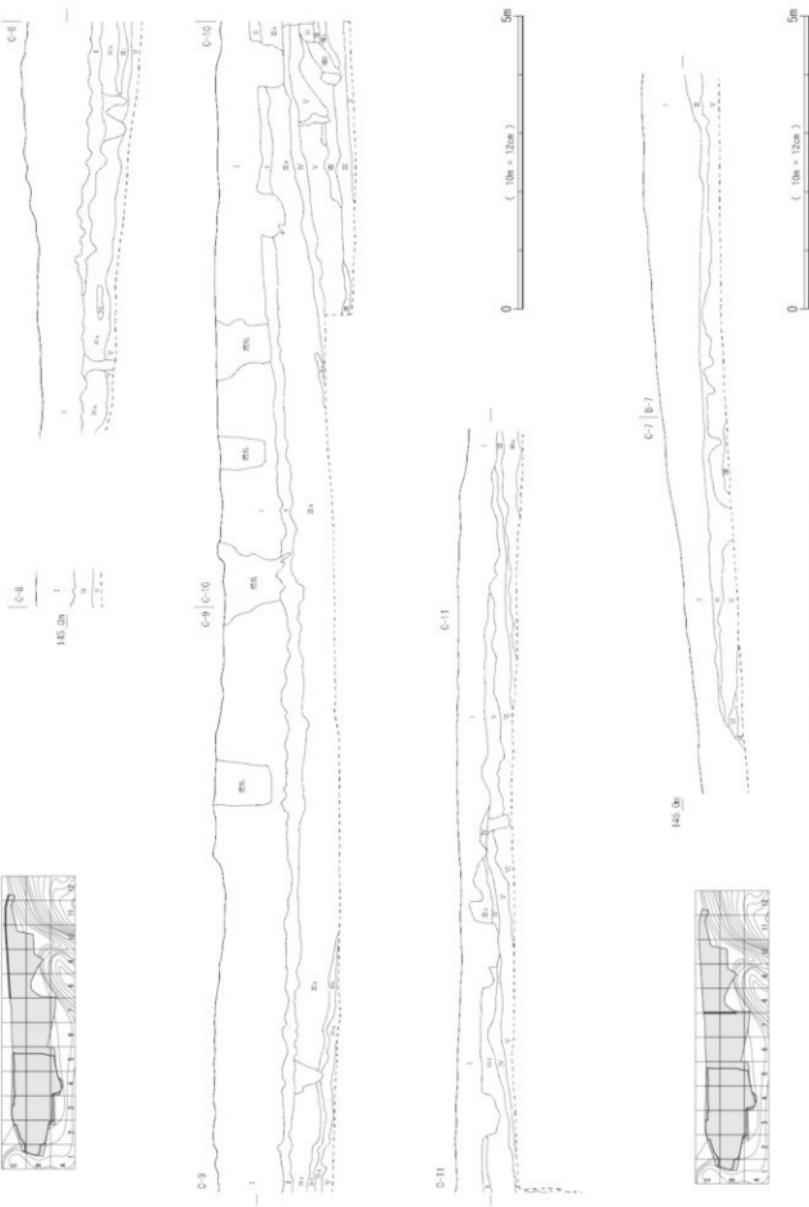
第4図 宮ノ上遺跡基本土層図



第5図 宮ノ上遺跡土層断面図(1)

第6図 宮ノ上遺跡土層断面図（2）





第7図 宮ノ上遺跡土層断面図（3）

第3節 整理作業の方法

宮ノ上遺跡では、概ね次のような作業手順により整理作業を進めた。

平成16年度・平成17年度

(1) 水洗

遺物の水洗は主として発掘調査現場で行った。

発掘調査現場では乾燥後遺物カードと共に袋詰めまでの作業を行い、以降の作業は発掘作業終了後に埋蔵文化財センターで行った。

平成19年度～平成21年度

平成19年度は遺物の一時選別と実測遺物の選定、実測委託、注記、接合作業を中心に作業を行った。また、平成21年度は土器実測・拓本を中心に作業を行った。

なお、石材分類については、第4表に示した基準に基づき、肉眼的特徴による分類を行った。分類基準は、宮ノ上遺跡旧石器時代編の分類基準をベースとしたが、縄文時代の石器が中心となったこともあり、必要以上の細分は行っていない。ホルンフェルス類については、石斧や大型削器が中心となる石器組成にあわせて、細分基準を変更した。

各工程における作業の概要は概ね以下の通りである。

(1) 注記

土器等について、注記作業を行った。原則として白のボスタークラーで遺跡記号、グリッド、層位、取上Noを記載した。

(2) 土器接合

土器接合作業は、注記後、土器群の大まかな分類を行い、グリッド・層ごとに行った。接合作業の進行と共に分類や接合範囲を適宜変更し、接合率の向上に努めた。

(3) 土器実測遺物選別

一次選別では、大まかな分類ごとに実測遺物を選別し、実測番号を付与した。実測番号は遺跡内における通番として(“P+【4桁】”)として作業を進めた。実測遺物選別と同時に、実測No-取上No対応表を作成し、分布図・観察表等の基礎データとした。

(4) 土器実測・拓本

土器実測は、実測遺物の選別後、埋蔵文化財センターで行った。器形が良好に復元できる一部の資料については、実測委託を行った。実測遺物には全て実測番号を付与し、遺物、実測図、台帳に記載して作業管理を行った。

拓本については全て埋蔵文化財センターで行った。実測図と同様に実測Noを拓本及び台帳に記載して作業管理を行った。

(5) 石器実測遺物選別

一次選別では、作業を①実測遺物の選抜、②剥片分類、③碎片分類、④礫分類に区分し選別を行った。なお、作業にあたっては次の事項に留意した。

①実測遺物選別

実測遺物の選別にあたっては、石材分類と並行して行い、石材ごとに製作される器種や製作行為の内容を考慮

して、製品のみでなく未製品、石核、製品素材となりうる剥片等についても選別を行った。なお、剥片や磨石・敲石等については、必要に応じて二次選別を行った。

②剥片分類

剥片については、石材分類のみを行った。必要に応じて繰り返し作業を行い、細分を行った。分類後、データ入力を行った。

③碎片分類

碎片については、概ね径5mm以下の小片を中心を選別した。なお、径5mmを越える場合であっても、ブロック状の碎片、風化部分等については径7mm程度までを碎片に区分した。分類後、データ入力を行った。

④礫分類

礫については石材、サイズ等を考慮しながら被熱破砕、自然礫等に区分した。なお、ハンマー等の石器類については実測遺物に区分した。分類後、石材や重量など必要なデータの記録と入力を行った。

(6) 二次選別

二次選別は、実測遺物選別を中心に行った。

二次選別では、一次選別において選抜した遺物を細かく観察し、実測が必要と判断した遺物について実測番号(“S+【3桁】”)を付与し、取上番号、出土区、層位、分類、石材等を実測遺物管理台帳に記載した。また、この段階で重量計測を行った。

剥片石器については、定型石器と削器等の主要な非定型石器についてはほぼ全点を実測した。また、剥片や磨石・敲石等の礫石器については、全体的な状況を勘案して二次選別を行い、復元率の高い資料を優先して全体の7割程度を実測した。

(7) 石器実測

石器の実測については、各整理作業年度に外部委託によって行ったものがあるほか、簡易なものについては埋蔵文化財センターで実測作業を行った。製図が終了した図面は順次スキヤナで読み込み、データを蓄積した。

(8) 座標データ処理

宮ノ上遺跡では、発掘調査の一部民間委託により、成果品として遺物出土位置座標や遺構測点などが座標データとして納品された。

座標データの処理はこれらの納品済データを基にして行った。なお、使用する座標系についてはグリッド配置図に準じて、座標データをA-1区北西隅を原点とする任意座標系に変換して使用した。また変換結果を元に分布図を作成し、国土座標ベースのものと比較して齟齬がないことを確認した。

座標データの処理に併せ、層位、グリッド、取上日等のデータについても発掘調査時のデータを基に確認・統合を行った。特に、グリッドについては座標値との整合性を確保する観点から、座標値に基づく再判定を実施した。このため、注記と観察表に表示されるグリッドは異なる場合がある。なお、発掘調査時の記載情報は備考欄

に転載した。

これらの座標データは、"遺物座標DB"としてExcel形式で保存し、分布図作成等の諸作業に利用した。

(9) 分布図作成

処理した座標値を基に、層位別の総点ドットを作成した。宮ノ上遺跡の縄文時代以降の遺物は概ねV層～II層に相当し、中でもⅢ層で最も多くの遺物が出土していることが発掘現場での所見により判明していたが、これを分布図でも確認し、接合作業やその他の整理作業の進め方を検討した。

平成23年度

平成23年度は平成21年度に継続し土器の実測・拓本を行い、併せて報告書作成のためのデータ処理と原稿作成・写真撮影等の作業を行った。

また、土器実測・拓本等の作業と並行して实体顕微鏡等を使用して胎土の観察・分類を行った。

なお、報告書作成はデジタル技術を活用し、写真図版を除き、原稿の全てをデジタルデータで作成した。

(1) 土器実測・拓本

平成23年度も継続して作業を行った。作業方法は平成21年度までと同様であるが、実測図と拓本については再度確認を行い、並行して必要な追加と修正を行った。

(2) 石器実測

平成21年度までに実測した遺物を確認し、必要な修正と追加を行った。磨石、敲石、石皿、台石等については埋蔵文化財センターへ新規に追加して実測を行った。

(3) 拓本データ処理

拓本については、個別に取込用台紙に貼付し、台紙ごとにスキャナで取り込み、個別にファイル保存してタブレットを使用して切り抜き処理を行い、拓貼用の基礎データとした。ファイル名は「[実測No] + [部位記号]」とし、部位記号は外表面を[A]、内表面を[B]、口唇部を[K]、底部外面を[Ta]、底部内面を[TB]として実測Noの末尾

に追加した。なお、取り込みから切り抜きまでのデータ処理は原寸のグレースケール600dpiで行った。

(4) 土器実測図トレース

土器実測図のトレースについては、Photoshopと液晶タブレットを使ってデジタルトレースを行った。

実測図をスキャナで取り込み、実測Noでファイル保存を行った後に必要な事前処理を行い、原寸のグレースケール600dpiでトレースを行った。

(5) 拓貼処理

拓貼処理は切り抜き作業まで終了した拓本画像とデジタルトレース画像を個別に1200dpi-1/3に縮小し、実測Noを基準にファイルを統合した上で行った。この段階での処理は、実測図画像を背景にして拓本の位置・角度、不要部分の切除を中心とし、最終段階で調整レイヤーを使用して色調補正を行った。なお、調整レイヤーで補正しきれない場合には、各レイヤーの画像を直接補正した。

拓貼処理完了後、仮レイアウト用の画像データを作成し、レイアウト作業の基礎データとした。

(6) 遺構実測図トレース

遺構実測図等のトレースは、従来通りロットリングにより行った。ただし、一部の実測図についてはPhotoshopと液晶タブレットによるデジタルトレースを行っている。

ロットリングでトレースした実測図についても取込用台紙に貼付後スキャナで読み込み、写植等の作業はデジタル方式で行った。

(7) 遺構配置図作成

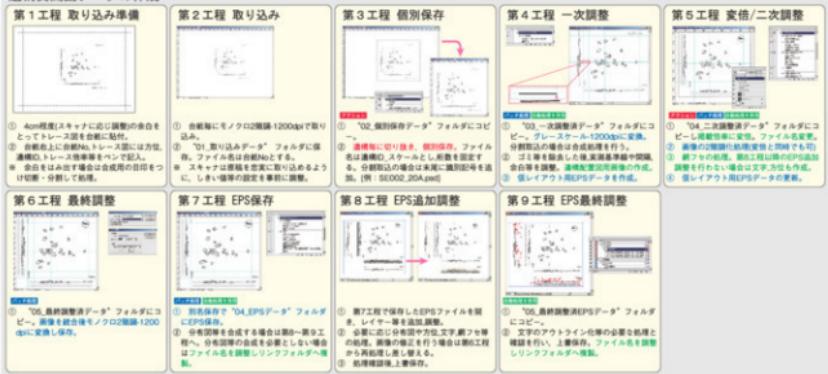
遺構配置図は、発掘調査により作成されたデータを元に、遺構実測図トレース画像等を利用して作成した。

必要に応じて分布図や地形図等も併用し、総合的な理解が可能となるよう工夫した。

(8) 分布図作成

整理作業の各段階及び報告書作成段階では、作業目的

遺構実測図データの作成



第8図 遺構実測図データ処理工程

に応じて、各種の分布図作成を行った。

基礎データはExcelで作成し、Illustratorを使用して作成した。必要に応じて構造配置図や地形図等を併用し、総合的な理解が可能となるよう工夫した。

(9) 報告書作成

報告書作成は、デジタル方式で行った。分布図、実測図等の要素を全てデータとして作成し、データ入稿を行うものである。使用した主な機材は、次のとおりである。

デスクトップパソコン (CPU:Core2Duo 3.00GHz)

土器実測図データ

第1工程 実測図取り込み

① 地図面をグレースケール400dpiで取り込み。
② “01_取り込みデータ” フォルダに保存。ファイル名は地図Noとする。
※ 地図Noが複数ある場合は、各々の名前を付ける場合分けをどのようにファイル名を工夫。

第2工程 トレース準備

① “02_トレースデータ” フォルダにコピー。
② 植生の実測図を含むファイルをコピー・分割し、実測図とファイル名が1:1となるよう整理する。
③ フォルダ内に複数ある場合は、各々の名前を付ける場合分けをどのようにファイル名を工夫。

第3工程 トレース

① “02_トレースデータ” フォルダの各ファイルを順次開き、トレース。
② トレース後、上書き保存。
※ 複数はトレース倍数と削除並び、縮小率を考慮後、必ず事前に正規化保存。

第4工程 実測図変倍

① “03_変性地図測定データ” フォルダにコピー。
② プリントサイズのまま1200dpiで変換。
※ 実測図のプリントサイズは1:3となる。

第5工程 拓本取り込み準備

① AutoCAD(スクリプトに応じ調整)の白地をとって配色を手動に貼付。
※ 白地面上に印刷No.原本は実測図と部記号(内側□と外側△と直角×)を記入。
※ 各白地に貼付場合は分割して貼付。

第6工程 拓本取り込み

① 台帳面にグレースケール400dpiで取り込み。
② “01_取り込みデータ” フォルダに保存。ファイル名は台帳Noとする。
※ スキャナ原点位置に合わせるために、鏡面の設定を事前に記録。

第7工程 個別保存

① “02_個別保存データ” フォルダにコピー。
② 原始図に同じ名前で保存。ファイル名は実測図の部記号とし、桁数を確定する。
③ 連絡表データを複数枚複数枚を一つのPDFに、レイアウトで貼り付ける。(例: P0002_A.pdf)

第8工程 拓本切り抜き

① “03_拓本切り抜きデータ” フォルダにコピー。
② 連絡表データを複数枚複数枚を一つのPDFに、レイアウトで貼り付ける。
③ フォルダ内に複数ある場合は、不要部分をカットする。確認後、上書き保存。

第9工程 拓本変倍

① “04_変性地図測定データ” フォルダにコピー。
② 分割処理したものはここで合成し、各倍率で1:1倍率となるようファイル名を調整しリソーシングフォルダへ複数。
③ プリントサイズのまま1200dpiで66.7%。

第10工程 合成

① フォルダごとに資料で出来た各部記号を複数枚複数枚を一つのPDFに、レイアウトで貼り付ける。
※ 各白地に貼付場合は分割して貼付。

石器実測図データ

第1工程 取り込み準備

① 4cm幅のスマートに正面に複数の白地をつけてレース紙にて台帳面に貼付。
② 台帳面にグレースケール1200dpiでトレース圖は実測図No.並んで貼付。
※ 台帳面の複数枚複数枚は台帳用の印目をつけて並んで貼付して記録。

第2工程 取り込み

① 台帳面にグレースケール1200dpiで取り込み。
② “01_取り込みデータ” フォルダに保存。ファイル名は台帳Noとする。
③ スキャナ原点位置に合わせるために、鏡面の設定を事前に記録。

第3工程 一次調整

① “02_一次調整データ” フォルダにコピー。
② フォルダ内に複数ある場合は、色調補正と2次元化のためのレイヤーを調整。
※ カラー部分が400dpiで複数枚複数枚を一つのPDFに、レイアウトで貼り付ける。各セクションごとに色調補正を調整。

第4工程 個別保存

① “03_個別保存データ” フォルダにコピー。
② フォルダ内に複数ある場合は、各セクションごとに色調補正を調整。
※ 各セクションは実測図とし、名前を設定。分離処理したものはここで合成し、各実測図に1:1倍率となるよう調整。

第5工程 二次調整

① “04_二次調整データ” フォルダにコピー。
② フォルダ内に複数ある場合は、各セクションごとに色調補正の複数枚複数枚を一つのPDFに、レイアウトで貼り付ける。各セクションは実測図とし、名前を設定。分離処理したものはここで合成し、各実測図に1:1倍率となるよう調整。

第6工程 三次調整

① “05_三次調整データ” フォルダにコピー。
② “04_二次調整データ” フォルダに保存。
※ 実測図とファイル名を複数枚複数枚の順番、実測図、台帳面。

第7工程 一次実倍

① “06_一次実倍データ” フォルダにコピー。
② レーザー写真にてPDF形式で複数枚複数枚を一つのPDFに、プリントサイズ1200dpiで複数枚複数枚を一つのPDFに、レイアウトで貼り付ける。

第8工程 二次実倍

① レーザー写真にて、“06_二次実倍データ” フォルダに保存。
※ PDF形式で複数枚複数枚を一つのPDFに、プリントサイズ1200dpiで複数枚複数枚を一つのPDFに、レイアウトで貼り付ける。

第9工程 最終調整

① “06_最終調整データ” フォルダにコピー。
② フォルダ内に複数ある場合は、各セクションごとに色調補正を調整。

第10工程 EPSデータ作成

① 両面を結合し、モノクロ変換1200dpiにて実測図EPSデータを作成。
② “04_EPSデータ” フォルダに保存。ファイル名を調整セレクションフォルダへ複数。

第9回 遺物実測図データ処理工程

スキャナ (EPSON ES-10000G)

また、データの処理には次のソフトウェアを使用した。

OS : Microsoft Windows XP

データ等の管理・処理 : Microsoft Excel

報告書編集 : Adobe InDesign CS3

実測図データ処理、写真処理 : Adobe Photoshop CS3

分布図作成、地形図作成等 : Adobe Illustrator CS3

なお、上記（3）～（6）の作業は、諸作業の進行に応じて適宜作業グループを作成し、グループごとに工程

管理を行うことで作業の効率化を図った。実測図データの処理工程については、第8図及び第9図に概要を示す。

また、土器胎土及び石材分類基準については第3表及

び第4表に示し、写真を図版51~52及び図版53~57に示す。

第3表 宮ノ上遺跡土器胎土分類基準

分類方法	1 肉面（板状、束状等）：経面での明瞭を基とする。		
	2 肉面で剖面が複数ある試物をとして、「金剛石」、「金閃石」を割り上げ、胎土の特徴として「赤色粒」と注目する。		
	3 この観点で元々に觀察を行ひ、「下野のおり」[A-H]の8区分に分離する。		
	4 角閃石と輝石の判別が困難な場合は無別で、上記区分に「X」を追記した。		
	[5] 「石英」、「石英」については確認したが必ずしていたため、特に記述はしていない。		
胎土類	金色雲母 青閃石 黒or輝 赤色粒		備考
A	○ ○ ○ ○ ○ X	- -	X 黄色雲母：花崗岩を鉛いたか、葉雲母を含む砂岩を温帯則として用いたと思われるもの。 -石灰岩の外見材料採集可視地：金峰山、向山山、永吉山、大川など
B	○ ○ ○ ○ ○ X	- -	青閃石：青閃石で安山岩あるいは角閃石を含む火山噴出物を起源とする材料を温帯則として用いたと思われるもの。 -石灰岩の外見材料採集可視地：下山岳、中川川、永里川
C	○ ○ ○ ○ ○ X	- -	角閃石：角閃石で安山岩あるいは角閃石を含む火山噴出物を起源とする材料を温帯則として用いたと思われるもの。 -石灰岩の外見材料採集可視地：下山岳、中川川、永里川
D	○ ○ ○ ○ ○ X	- -	角閃石：角閃石で安山岩あるいは角閃石を含む火山噴出物を起源とする材料を温帯則として用いたと思われるもの。 -石灰岩の外見材料採集可視地：下山岳、中川川、永里川
E	○ ○ ○ ○ ○ X	- -	角閃石：角閃石で安山岩あるいは角閃石を含む火山噴出物を起源とする材料を温帯則として用いたと思われるもの。 -石灰岩の外見材料採集可視地：下山岳、中川川、永里川
EX	X	- ○ -	角or輝：銀鐵礦脈岩では角閃石と輝石の分別がつかなかったもの。 赤色粒：鱗片多くても粘土が凝結したみられる粘土を含むもの。 -川辺町及びその周辺では一般的な粘土材料。
F	○ ○ ○ ○ ○ X	- -	
FX	X	- ○ -	
G	○ ○ ○ ○ ○ X	- -	
H	○ ○ ○ ○ ○ X	- -	

第4表 宮ノ上遺跡石材分類基準

組	目	種	細	指標原産地(代表)
黒曜石1類[OB1]	● 不純物を多く含み、透光で全く光を通さないもの。			上牛島
	不純物を多く含み、光を通すものの。			
	透光は黒色～アメ色を呈するもの。			
A群 不純物をやや少く、透光は白～黄褐色を呈するもの。				日東五女木、長谷
B群 不純物が不均一に入り、径約5mm～1mm程度の石英質の不純物を多く含み、透光はアメ色を呈するもの。				三船
C群 不純物が一貫して右矢頭の不純物を多く含み、透光はほんんどを通さない灰褐色を呈するもの。				日東五女木、白浜
D群 球状の不純物を多く含み、透光はアメ色を呈するもの。またに流れが觀察される。				五女木・小糸、長谷
E群 少なく球状の不純物を多く含むもの。透光はアメ色を呈するもの。				長谷
A群 不純物を含まないかげなく会合のもので、アメ色～黄褐色を呈し、透光度が高いもの。基質にわずか白毫や流涙がみられるもの含む。				森ノ木津留、上青木
B群 不純物を含まないかげなく会合のもので、アメ色～オーリーブ色、黒色を呈し、A群に比べて透光度がやや低いもの。				(原産地不明[A群])
C群 不純物をほとんど含まないかげなく会合のもので、透光は白～黄褐色を呈するもの。透光度はほとんどないもの。				(原産地不明[B群])
D群 ブラックマーブルのガラス光沢を呈し、透光で底面の鏡面を呈するもの。黒化面は青灰色となるもの。				(原産地不明[C群])
東曜石1類[OB4]	● 不純物をほとんど含まないかげなく石英質の不純物をわずかに含み、基質は黒色で強いラスベズ光沢を呈するもの。黒化面は青灰色となるもの。			豊原、岸田ほか
	不純物をほとんど含まないかげなく石英質の不純物をわずかに含み、基質は白～黄褐色を呈するもの。質感はハリエーションがある。			針尾中町、吉里ほか
東曜石2類[OB5]	● 不純物をほとんど含まないかげなく石英質の不純物をわずかに含み、基質は白～黄褐色を呈するもの。質感はハリエーションがある。			針尾中町、吉里ほか
東曜石3類[OB6]	● 不純物をほとんど含まないかげなく石英質の不純物をわずかに含み、基質は白～黄褐色を呈するもの。質感はハリエーションがある。			椎葉川岸尾ほか
東曜石4類[OB7]	● 不純物をほとんど含まないかげなく石英質の不純物をわずかに含み、基質は白～黄褐色を呈するもの。質感はハリエーションがある。			根島
安山岩1類[AN1]	● 白石英の不純物を含むもの。基質はやや薄らぎでガラス質に質感を呈し、透光色は白～明灰色を呈するもの。			上牛島
安山岩2類[AN2]	● 不純物をわずかに含むもの。基質はやや薄らぎでガラス質に質感を呈し、透光色は白～明灰色を呈するもの。			多久
安山岩3類[AN3]	● 不純物をわずかに含むもの。基質はやや薄らぎでガラス質に質感を呈し、透光色は白～明灰色を呈するもの。			
安山岩4類[AN4]	● 鐘石や斜長石、漂砾的斜長石を含むもの。			
玉髓1類[GC1]	● 黄褐色の玉髓質を含み、白色～青色玉髓を基質とするもの。			
玉髓2類[GC2]	● 基質が比較的透質で白～青色の玉髓質を基質とするもの。			
チャート1類[CH1]	● 油脂光沢で白～青色のもの。(部分なし)			
水晶1類[CR1]	● 質感が鋭敏で白で透明感があり、質感なもの。			
水晶2類[CR2]	● 質感がやや白で透明感のあるもの。			
	全体として基質が緑系の色を呈するもの。			
黄岩1類[SH1]	● A群 不透明でやややわらぎのもの。基質はわずかに透明感があり、弱い油脂光沢を持つものがある。			
	B群 不透明でほどどと無光沢で、経理は発達せず、纏密で質感のもの。			
	C群 不透明でなく無光沢のもの。経理と比べて纏密感がある。			
黄岩2類[SH2]	● A群 不透明でほどどと無光沢で、経理は発達せず、纏密で質感のもの。			寛ノ上
	B群 不透明でほどどと無光沢で、経理は発達せず、纏密で質感のもの。			寛ノ上
	C群 不透明でなく無光沢のもの。経理と比べて纏密感がある。			寛ノ上・寛平野
黄岩3類[SH3]	● A群 不透明でやややわらぎのもの。			
	B群 不透明でほどどと無光沢で、経理は発達せず、纏密で質感のもの。			
	C群 不透明でなく無光沢のもの。やや柔らかにつつみ感を呈するもの。経理のみられない定質ホルンフェルスを含む。			
黄岩4類[SH4]	● シル・質岩質、基質ややや透質を呈するもの。			宮崎平野
	やや粒子が粗大・粗粒、経理が発達するもの。一部は結核状鉱物を呈する。			
黄岩5類[SH5]	● A群 あまり透光が進行せず、基質が青灰色を呈するもの。			
	B群 基質は白～青色を呈するもの。風化によって透光が白色を呈するもの。			
	C群 経理が発達する粗粒のもの。			
	あまり透光が発達しないもの。粒子が比較的細かく、やや纏密なものが多い。			
ホルンフェルス1類[HF1]	● A群 基質が黒色～暗灰色を呈するもの。			
	B群 基質が暗色～ベージュ色を呈するもの。			
	C群 基質が白色に変化するもの。			
	やや纏密が発達するもの。粒子が粗いもの。質感のもの。			
ホルンフェルス2類[HF2]	● A群 基質が黒色～暗灰色を呈するもの。			
	B群 基質が暗色～ベージュ色を呈するもの。			
	C群 表面が白色に変化するもの。			
	経理が発達するもの。粒子が細いもの。質感のもの。			
ホルンフェルス3類[HFS]	● A群 基質が黒色～暗灰色を呈するもの。			
	B群 基質が暗色～ベージュ色を呈するもの。			
	C群 表面が白色に変化するもの。			
碧岩1類[SA1]	● 絹粒砂岩。			
碧岩2類[SA2]	● 硅質砂岩。			
碧岩3類[SA3]	● 黃褐色砂岩。			

第IV章 宮ノ上遺跡の調査成果

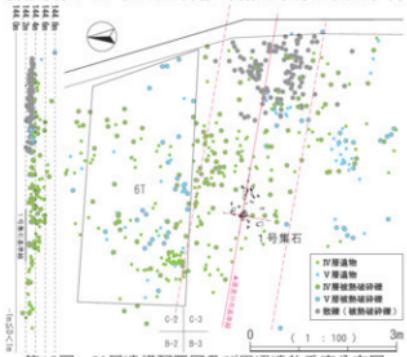
第1節 繩文時代早期の調査

1 遺構

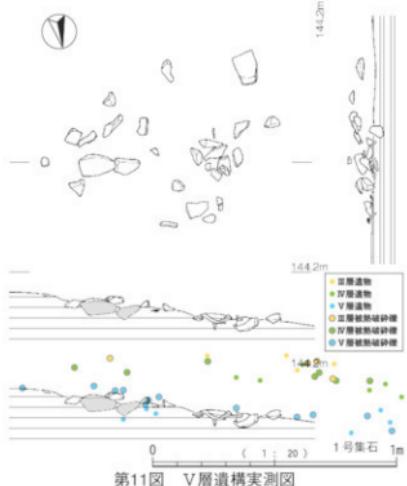
縄文時代早期の包含層であるIV層～V層にかけては、C-3区を中心に礫等の集中的な散布がみられる。遺構としては、集石2基を検出した。

1号集石

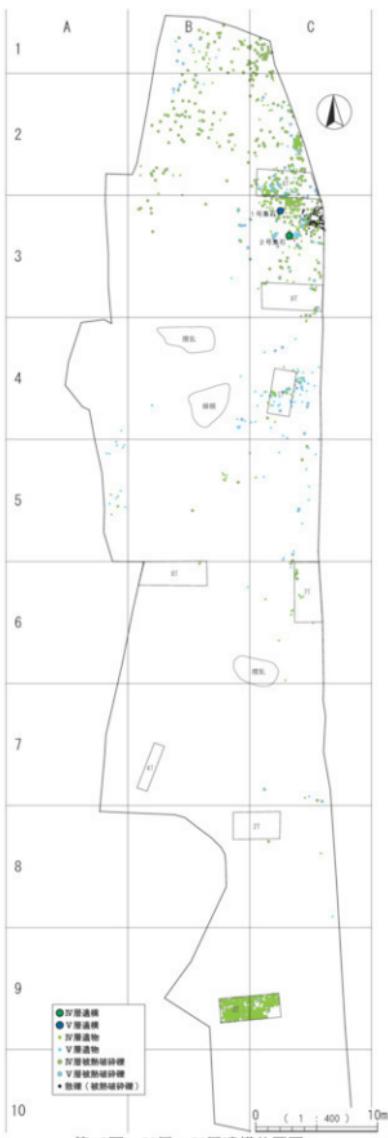
C-3区のV層から検出された。構成礫の大きさは5～15cmで、扁平な角礫が主体を占める。明確な掘り込みは確認されていない。数m東側の調査区境付近には被熱破碎礫の集中域が検出されており、垂直分布から旧地形の傾斜を考慮すると、これらは同一層単に位置する。礫接合を行っていないため両者の関係は不明であるが、同



第10図 V層遺構配置図及び周辺遺物垂直分布図



第11図 V層遺構実測図



第12図 IV層～V層遺構位置図

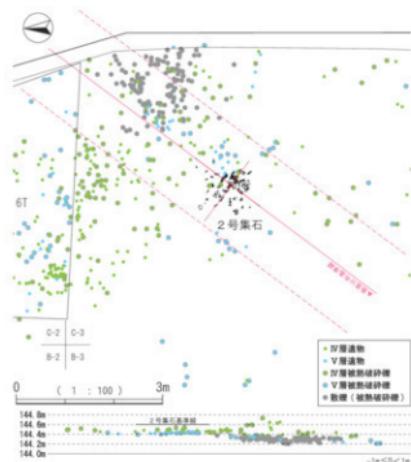
一時期の所産である可能性が高い。

2号集石

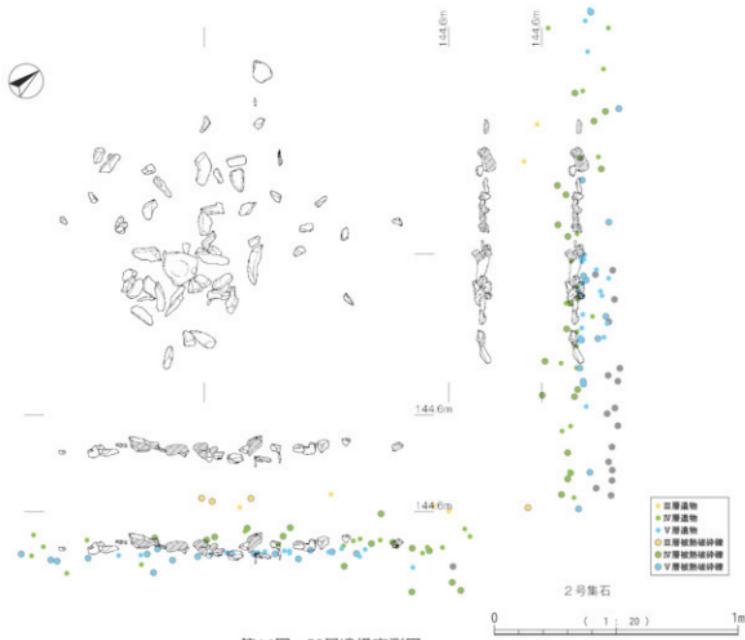
C-3区から検出された。発掘調査段階ではⅢ層検出とされているが、周辺の被熱破碎等の垂直分布と併せて検討すると、Ⅳ層相当の遺構とみなすのが適当である。

礫は130cm×130cmの範囲の中で収まっており、中心部から放射状に広がっている。レベル差は10cmで、ほぼフラットな状態で構成されている。

礫は5~15cm大の角礫が主体を占める。石材は多種で、約半分を泥岩が占め、残りは砂岩、頁岩、玄武岩、安山岩で構成されている。また、被熱が確認されている礫は57点のうち15点と少ない。断面の状況から浅い掘り込みがある可能性も考えられるがプランとしては検出されておらず詳細は不明である。



第13図 IV層遺構配置図及び周辺遺物垂直分布図



第14図 IV層遺構実測図

2 土器

1類土器 加栗山タイプ

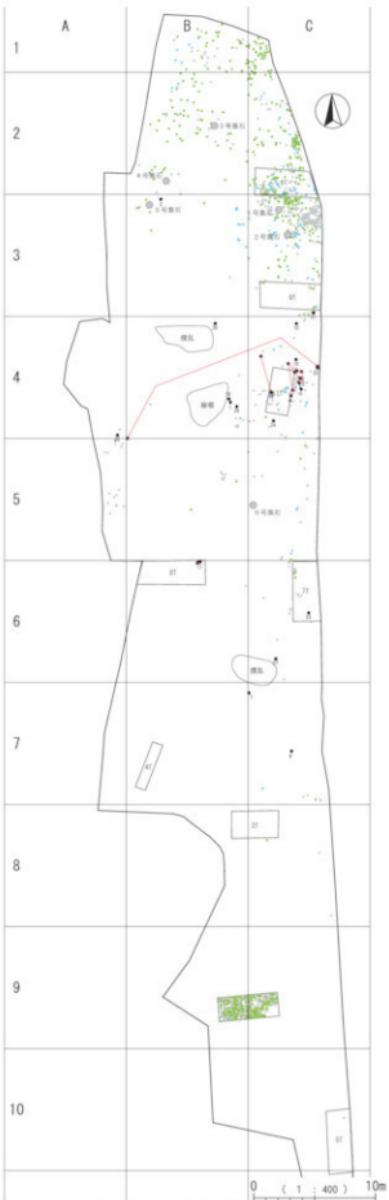
鹿児島市加栗山遺跡で発見された縄文時代早期の土器群である。器形により円筒形土器をA類、角筒形土器をB類とした。

1 A類 円筒形土器

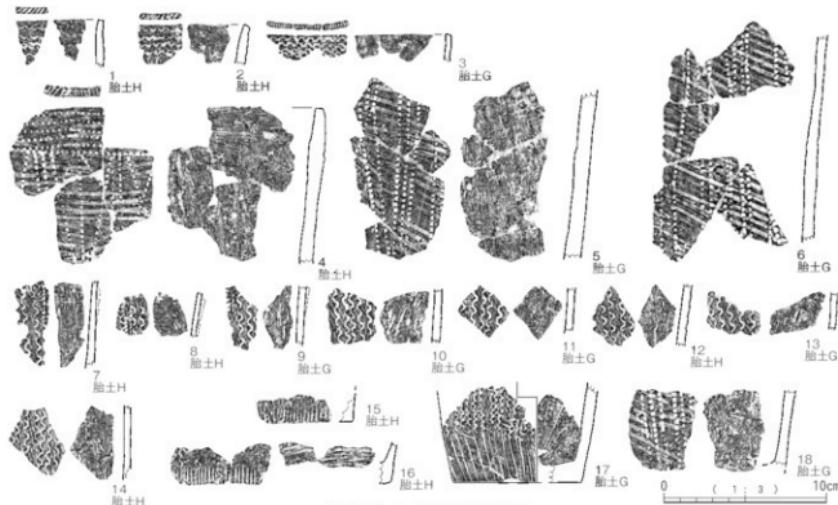
1~3は小破片であるが、1と2は口縁部の貝殻腹縁刺突線文から同一個体とみられるが、3とは口唇部の刻みや貝殻腹縁刺突線文、器壁の薄さに違いが見いだせる。4は円筒形土器の口縁部で、横方向の柔痕を地文とする薄肌色の器面に口縁部では横位に、胴部では縱位に貝殻腹縁刺突線文を施す。平坦な口唇部には鋭利な工具で斜めに刻みを施し、口縁部には貝殻腹縁刺突線文を横位6段に、胴部には並行文やX状の刺突文を施す。5.6は4と同一個体とみられる。いずれも外面は丁寧な条痕仕上げで、内面は上部が横方向、下部が縱方向の削り仕上げとなっている。7.8.9は口縁部直下の楔形突唇周辺資料である。楔の両端は櫛状工具で丁寧に刻み、楔間は貝殻腹縁刺突線文で縱位に刻みを施す。10~14は楔周辺を含む胴部資料で、縱位の貝殻腹縁刺突線文を施す。底部の15と16は同一個体で、17の接地面は平坦で正円形をなす。いずれも外面は丁寧なナデ仕上げで、特に17は器面に光沢を保っている。なお、貝殻腹縁刺突線文が底部沈線文に先行して施文されている。18も4と同一個体とみられる。なお、外面は丁寧な条痕仕上げで、内面は上部が横方向、下部が縱方向の削り仕上げとなっている。

1 B類 角筒形土器

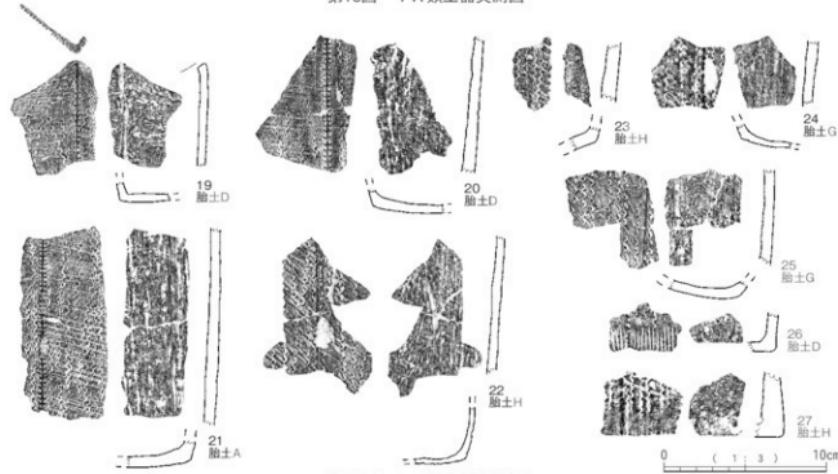
19は4隅が突起状に成形される筒形土器の口縁部で、口唇部幅は2~3mmと極めて薄い。その口唇部は、突起する4隅を起点に連続して刻みが施され、口縁部では並走する4段の、胴部では縱及び斜め方向の貝殻腹縁刺突線文が施文される。なお、貝殻腹縁刺突文は条痕仕上げの器面に直接施文されているが、口縁部や角筒の稜線部付近はその後撫でて仕上げている。一方、内側は稜線部のコーナーを境に、ヘラ状工具で横方向の削り仕上げとなっている。胎土は長石粒を多く含むもので、雲母の混入も観察できる。20.21は2点とも角筒の稜線部資料である。胎土等から19とこの2点は同一個体とみられる。20の左側上部には楔の一部を残し、2点とも内面は縱方向の削り仕上げとなっており、長石粒を多く含む胎土が特徴的である。22~25も稜線部資料であるが、先の19等とは胎土や器面等が異なる。25には両面にススが付着しているが、特に内側には多量のススが付着しており注目される。また、25や22の破片の観察からは、輪積み手法以外の製作技法の存在を想起させる。2点の底部はそれぞれ別個体とみられるが、胎土等からは26が19等に近いと判断している。



第15図 1類土器分布図



第16図 1 A 類土器実測図



第17図 1 B 類土器実測図

第5表 1 類土器観察表 (1)

測定No.	通No.	B上No.	X幅	Y幅	Z幅	壁厚	位置	クリヤ	土器	備考
1	2752	18547	37.034	144.692	3	8.4	H			
2	16525	12336	20.596	143.987	3	8.3	H			
3	一品	0.000	0.000	0.000	3	8.9	G			
4	4011	23.825	34.570	144.547	V	C4				
	7781	24.263	35.074	144.777	V	C4	H			
	16104	23.519	36.511	144.677	N	C4				
5	12390	24.361	35.965	144.647	V	C4				
	一品	0.000	0.000	0.000	3	C4	G			
	一品	0.000	0.000	0.000	3	C3.4				

第6表 1 類土器観察表 (2)

測定No.	通No.	B上No.	X幅	Y幅	Z幅	壁厚	位置	クリヤ	土器	備考
16										
6										
	12393	24.205	35.475	144.631	V	C4				
	16092	23.283	33.869	144.790	3	C4				
	16093	24.383	34.521	144.570	V	C4				
	17561	24.009	34.467	144.694	N	C4				
	17567	23.660	36.038	144.576	V	C4				
7	4615	20.063	60.056	144.795	3	C7				
	一品	0.000	0.000	0.000	3	C7	H			
8	6241	23.569	65.626	144.544	3	C7	H			
9	一品	0.000	0.000	0.000	3	C6	G			
10	一品	0.000	0.000	0.000	1	B7	G			

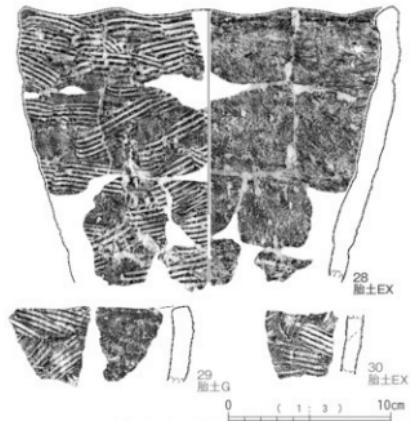
第7表 1類土器觀察表(3)

件目	回数	測定No.	X座標	Y座標	層位	グリッド	胎土	備考
16	11	0.000	0.000	0.000	Ⅲ	C-7	G	
12	0.000	0.000	0.000	Ⅲ	C-9	H		
13	0.000	0.000	0.000	Ⅲ	C-7	G		
14	0.000	0.000	0.000	Ⅲ	C-7	H		
15	18800	23.962	30.882	144.696	Ⅲ	C-4	H	
16	1167	21.888	36.230	144.562	Ⅲ	C-4	H	
17	7717	21.053	33.268	144.722	Ⅲ	C-4		
7459	15.933	50.137	144.493	Ⅲ	B-6			
7460	16.077	50.108	144.481	Ⅲ	B-6	G		
7580	15.837	50.211	144.446	Ⅲ	B-6			
7581	15.933	50.127	144.446	Ⅲ	B-6			
18	12349	23.930	33.532	144.590	Ⅲ	C-4	G	
19	12462	18.432	36.795	144.594	複数	B-4	D	
20	18777	17.298	30.584	144.398	複数	B-4	D	
21	20114	25.370	29.707	144.537	V	C-3	A	
一組	0.000	0.000	0.000	複数	B-4			
17	9739	25.684	34.221	144.747	Ⅲ	C-4		
12367	25.704	34.208	144.744	Ⅲ	C-4			
14393	25.681	34.097	144.603	V	C-4			
40107	10.103	39.988	144.113	Ⅲ	B-4			
一組	0.000	0.000	0.000	Ⅲ	C-4			
23	9553	24.972	54.295	144.864	Ⅲ	C-6	H	
24	18108	22.079	36.963	144.520	Ⅲ	C-4	G	
25	41845	9.282	39.730	143.874	Ⅲ	A-4	G	
26	9881	19.068	37.390	144.642	Ⅲ	B-4	D	
27	4561	22.271	56.958	144.906	Ⅲ	C-6	H	

2類 桑ノ丸式土器

霧島市溝辺町桑ノ丸遺跡出土の土器を標識とする、縄文時代早期の土器群である。

28は口縁部は緩やかに内弯し、器壁は口唇部に近づくに従って厚くなる。やや内側に傾く口唇部は、丁寧に撫でられ、平坦で頑丈な仕上がりとなっている。また、緩やかな波状口縁を呈し、貝殻腹縁による短い条痕文を横位や斜位に重ねて全体を波状様に仕上げ、施した条痕文の一部を意図的に、且つランダムにナデ消している。胎土はやや大粒の凝灰岩粒や長石粒、角閃石に加え、軽石粒を含むものである。基本的に両面ともに撫でて仕上げるが輪積み痕は観察でき、特に内側では明瞭に残されている。29は口縁部に綾杉状の施文が観察できる。30は胴部資料で、胎土は28に酷似する。



第18図 2類土器実測図



第19図 2類土器分布図

第8表 2類土器観察表

測定No.	図No.	頂上No.	X座標	Y座標	Z座標	部位	グリッド	胎土	備考	
18	28	7406	24.024	18.270	144.372	B	C-2			
		14944	25.166	21.342	144.410	B	C-3			
		14949	24.641	21.992	144.391	B	C-3			
		15987	24.416	22.121	144.258	V	C-3			
		15988	24.460	22.093	144.352	V	C-3	EX		
		15989	24.573	22.134	144.331	V	C-3			
15700	24.596	22.195	144.344	V	C-3					
一品	0.000	0.000	0.000	N	C-3					
一品	0.000	0.000	0.000	-	-					
29	13842	26.344	74.964	144.210	B	C-8	G			
30	16020	26.008	77.936	143.904	B	C-8	EX			

3類 苦浜式土器

中種子町苦浜貝塚から発見された土器群で、現在では南九州縄文時代早期終末の土器として、東九州の右京西タイプ土器と対比される。

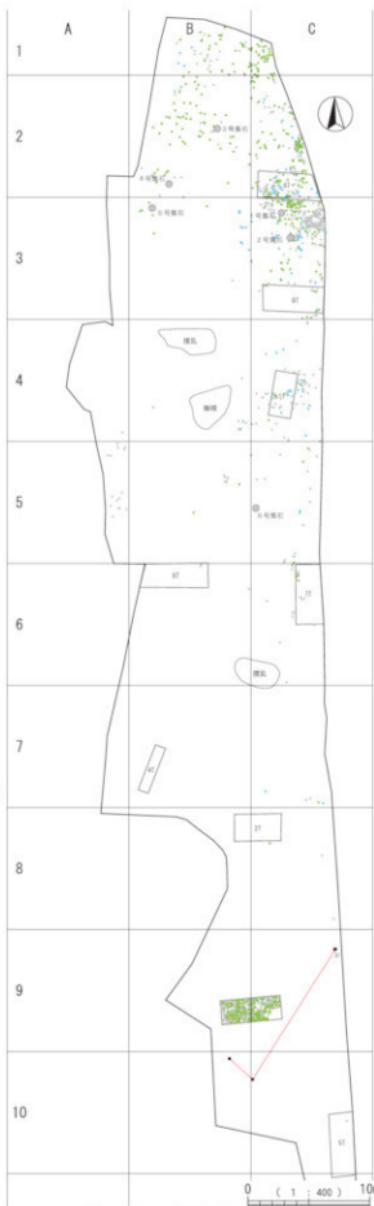
31は緩やかに外反しながら立ち上がる形状で、口唇部は尖り気味に撫でて仕上げられている。条痕仕上げの器面に3本の隆帯を巡らし、隆帯に二枚貝で連続して刻みを施す。隆帯は施文帯を周回する意匠がみられるが、2本目は途中で屈曲する。なお、施文時の痕跡とみられる爪痕が、隆帯に沿って部分的に残されている。内面調整はヘラ状工具で丁寧に撫で、胎土に多く含まれる大粒の凝灰岩粒を塗り込めるように器面を調整している。分類には課題を残すが、早期末の貝殻条痕文土器と認定した。



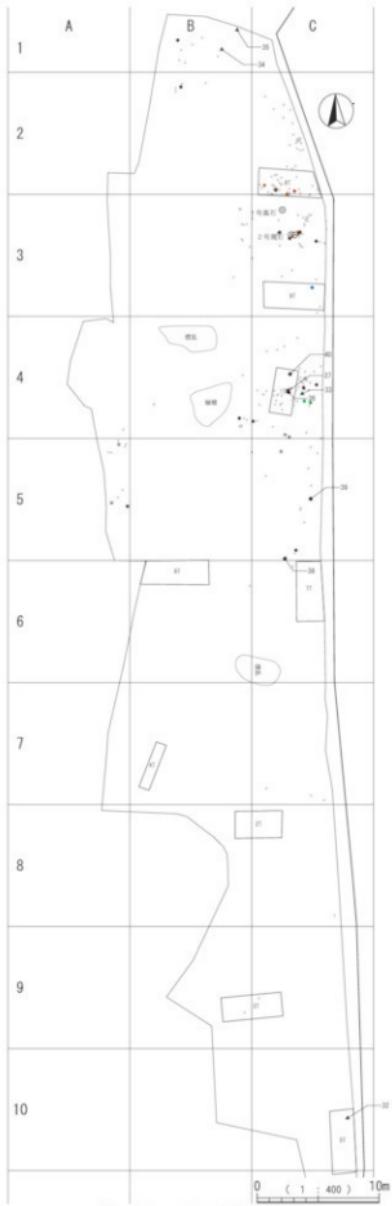
第20図 3類土器実測図

第9表 3類土器観察表

測定No.	図No.	頂上No.	X座標	Y座標	Z座標	部位	グリッド	胎土	備考	
20	31	5353	26.872	81.622	144.068	B	C-9			
		6732	26.823	81.615	144.038	B	C-9			
		8743	26.944	81.605	144.018	B	C-9	F		
		13978	20.141	92.278	143.473	B	C-10			
		15491	18.241	90.579	143.133	B	B-10			



第21図 3類土器分布図



第22図 V層石器分布図

3 石器

ここでは、Ⅶ層～V層で出土した石器を取り扱う。

VII層以下で出土した石器は自然層位との対比では縄文時代草創期以前に位置づけられる可能性があるが、石器形態から縄文時代早期以降に位置づけられる可能性のあるものについてはここで取り扱う。

なお、縄文時代草創期に位置づけられる可能性のある石器群については旧石器時代編第IV文化層遺物として報告した。

32～35は石鏃である。32は小型正三角形鏃に類するもので黒曜石I類を素材とする。非常に小型の製品で丁寧な二次加工が施されており、基部に浅い抉りが作出されている。33も比較的小型の製品であるが、二次加工は周縁部にとどまり中央部に広い素材面を残す。

34はやや二等辺三角形状を呈する石鏃である。基部に浅い抉りが施されており、側縁に小突起が作出されている。Ⅶ層からの出土となつており下層からの浮き上がりの可能性もあるが所属時期については慎重に判断を行う必要がある。35は基部に深い抉りを作出する、いわゆる鏃形族に類するものである。右脚部は欠損しているが、表裏とも丁寧な加工が施されている。

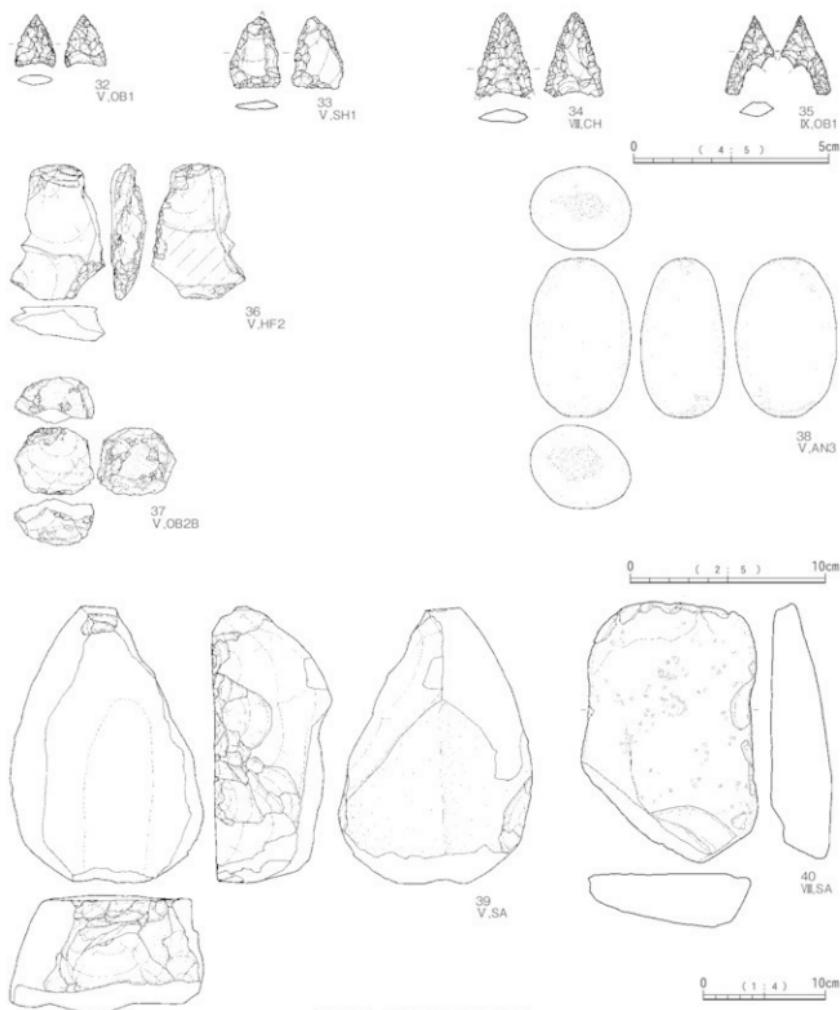
36は楔形石器である。ホルンフェルスII類を素材とするもので、上下端部には鉛直方向からの加撃による潰れが観察される。側縁には表裏からの整形剥離が繰り返し施されている。

37は石核である。黒曜石II類を素材とするもので、小型の亜角鏃を素材として、自然面を打面に剥片剥離を行っている。

38は安山岩III類の長円形の円鏃を素材とする叩石である。上下の端部に敲打痕が観察される。

39は厚い砂岩の板状礫を素材とする台石である。上面に形成された平滑面の中央付近には、幅7cm程度の周囲と比べて顯著に平滑な部分が形成されており、砥石の可能性がある。最終的には大型剥片を剥離する石核として転用されており、側面と下面には平滑面を打面とする作業面が形成されている。

40は厚さ5cmほどの砂岩の板状礫を素材とする台石である。やや薄手の板状礫を素材としており、周縁には簡単な整形加工が施されている。



第23図 V層出土石器実測図

第10表 V層石器観察表

序番	回数	回No	取上No	X座標	Y座標	Z座標	クリック	層位	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
23	32	6424	27.865	95.696	143.537	C-10	V	打制石器	OB1	14.0	10.5	2.3	6.2		
		12394	24.145	36.336	144.596	C-4	V	打制石器	SH1	18.5	13.0	2.8	6.7		
		19587	17.549	8.124	143.131	B-1	鉈	打制石器	CH	21.5	14.6	3.1	1.0		
		27392	18.807	6.532	142.855	B-1	打制石器	OB1	20.2	12.3	3.8	6.5			
		36962	22.991	36.151	144.427	C-4	V	打制石器	HF2	69.7	48.1	18.3	58.4		
		5169	22.971	36.128	144.347	C-4	V	石核	OB2B	34.4	40.2	24.0	30.9		
		19933	22.723	49.867	144.479	C-5	V	叩石	AN3	81.5	52.0	43.0	272.0		
		20117	24.839	44.950	144.428	C-5	V	台石	SA	226.8	158.5	99.1	3900.0		
		7864	23.153	34.724	143.866	C-4	鉈	台石	SA	215.0	146.0	52.5	2172.0		

第2節 繩文時代前期～中期の調査

1 遺構

自然層位のⅢ層に相当する。

Ⅲ層該当の遺構は集石4基が検出されているが、後述する縄文時代後期～晩期相当の包含層とは層位的な区分は困難である。Ⅲ層相当の遺構は出土した遺物量からみて、そのほとんどは縄文時代後期～晩期相当の遺構である可能性が高いため、ここでは取り扱わず、第3節で報告を行う。

2 土器

縄文時代前期から中期の土器は、出土点数が極めて少ないが、4類土器が該当する。

4類 深浦式土器

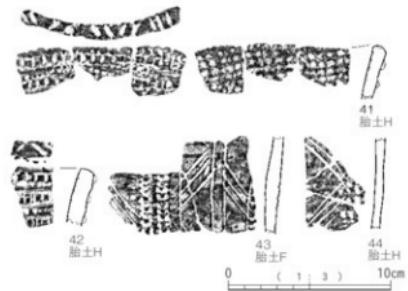
本県及び宮崎県南部を中心に分布する土器群で、縄文時代前中期～中期前葉に位置づけられる。

41～44の4点で、44は胎土や器壁の厚さ等が前3点とは異なる。

41,42の器壁は厚手で、やや丸味をなす口唇部は工具で縱及び斜めに刻み企画性が存在するとみられる。口縁部にいわゆる割目突帯文を2～3本貼付ける。なお、器面上に貝殻腹縁刺突線文が地紋として残され、内面には貝殻腹縁連続刺突文（貝殻連点文）が施される。43は、縱位2列の貝殻腹縁連続刺突文と縱位2列の並行沈線文間を斜位3列の並行短沈線文で充填する。

3 石器

当該期の石器も自然層位のⅢ層に相当すると思われるが、縄文時代後期～晩期相当の石器群との明確な区分は困難であり、土器等の出土状況からみて点数も少ないと予想されるため、第3節に含めて報告を行う。



第24図 4類土器実測図

第11表 4類土器観察表

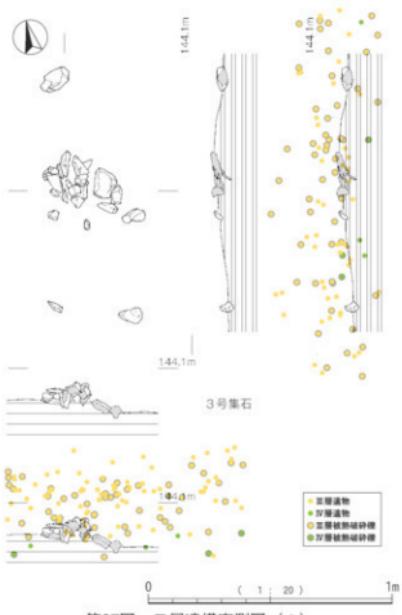
測定番号	測定番号	X座標	Y座標	Z座標	層位	グリッド	胎土	備考
41	6692	24,568	83,212	144,000	Ⅲ	C9		
	-B1	0,000	0,000	0,000	Ⅲ	C9	H	
	-B2	0,000	0,000	0,000	Ⅲ	C9		
42	11743	23,207	81,185	143,775	Ⅲ	C9		
	-B1	0,000	0,000	0,000	Ⅲ	B9	H	
	-B2	0,000	0,000	0,000	Ⅲ	C8	F	
43	11743	23,207	81,185	143,775	Ⅲ	C9		
	-B1	0,000	0,000	0,000	Ⅲ	C9		
	-B2	0,000	0,000	0,000	Ⅲ	C10	H	
44	-B1	0,000	0,000	0,000	Ⅲ	B9		
	-B2	0,000	0,000	0,000	Ⅲ	B9		



第25図 4類土器分布図



第26図 III層遺構位置図



第27図 III層遺構実測図(1)
第3節 繩文時代後期～晩期の調査

1 遺構

III層で検出されたものである。集石が4基検出され、3号～5号は調査区西側のB-2,3区に集中して検出された。

3号集石

B-2区のIII層から検出された。礫は40cm×30cmの範囲に集中しており、同構のものと思われる礫が周間に点散在している。検出状態でのレベル差は約8cmと、ほぼフラットな状態で残されている。

礫は5～15cmの角礫が主流である。石材は砂岩と泥岩が大半を占めており、被熱しているものは少ない。掘り込みは確認できなかった。

4号集石

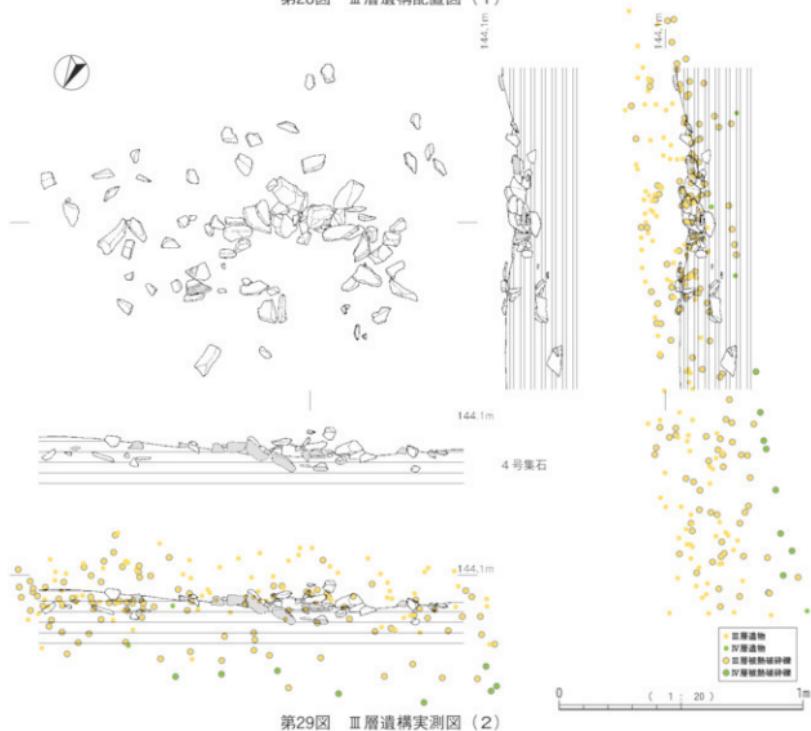
B-2区のIII層から検出された。礫は150cm×150cmの範囲に収まっているが、中心部では構成礫が縦長に集中しており、その周間に礫が散在している。レベル差は36cmである。

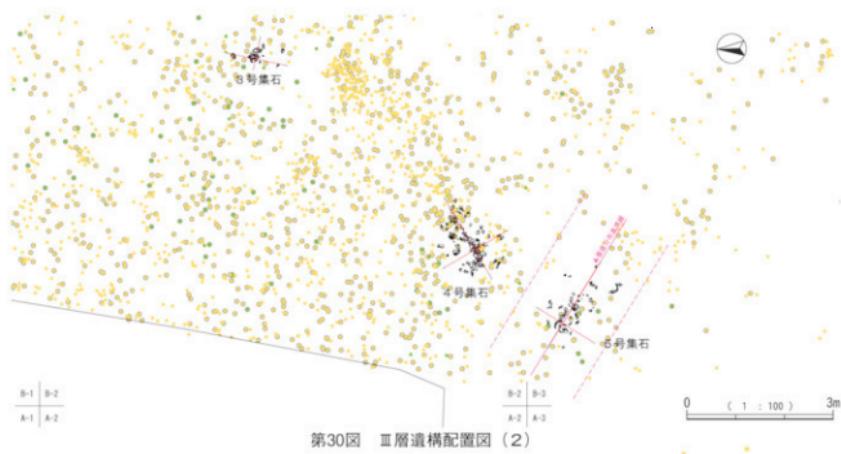
礫は角礫が主体であり、中心部には10～20cmの大きめなもののが集中して組まれている。

掘り込みは確認されていないが、断面からは浅い掘り込みが存在する可能性も考えられる。

5号集石

B-3区のIII層から検出された。礫は100cm×70cmの範





144.1m

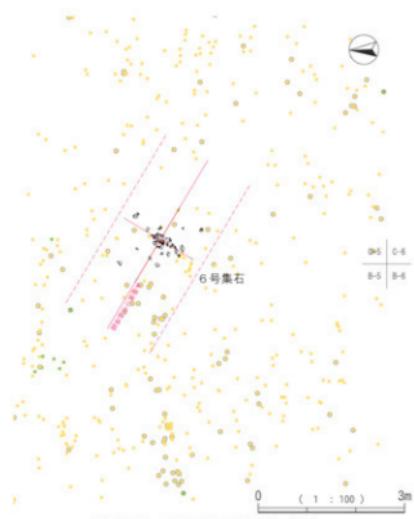
5号集石

144.1m

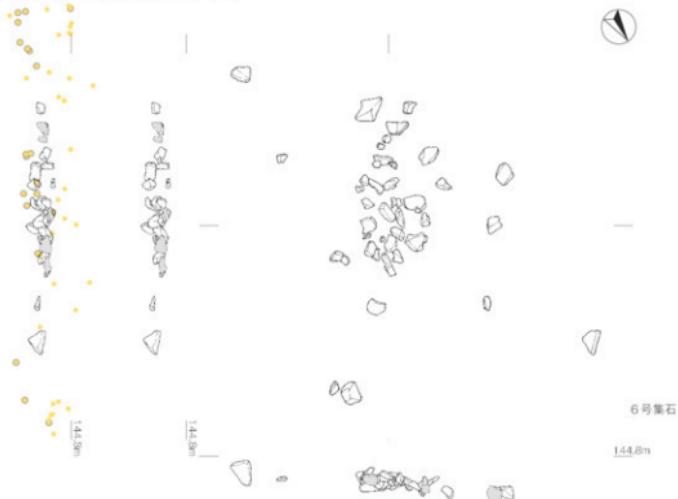
第30図 Ⅲ層遺構配置図 (2)



第31図 Ⅲ層遺構実測図 (3)



第32図 III層遺構配置図（3）



第33図 III層遺構実測図（4）

間に集中しており、その周りに10点の散石が認められる。レベル差は30cmである。

礫は10cmを超えるものが多く、頁岩を主体とした角礫で構成されている。掘り込みは確認できなかった。

6号集石

C-5区のⅢ層から検出された。礫は70cm×50cmの範囲に集中しており、レベル差は15cmの範囲内に収まっている。

礫は2~10cm大の角礫が主流を占めており、石材は砂岩が主体で頁岩は2点のみである。被熱が認められるものは、44点のうち22点と全体の50%を占める。それ以外の礫にもクラックがみられ、割れやすく脆いものが多い。礫が集中していることと、被熱した割合が多いことから、調理施設として利用されていたものであり、その使用頻度は高かったと考えられる。被熱した礫の並びに規則性は特に認められないため、使用後に散乱したと思われる。掘り込みは確認できなかった。

2 土器

5類 山ノ中IAタイプ

鹿児島市山ノ中遺跡で抽出された土器群で、胴部上半から口縁部方向に右上がりの大波文が施文されるものである。本遺跡では施文具の多様化がみられ、大波文の由来となった四線文と大波文程の大振り感は薄れ、半截竹管状工具や沈線文が主体となる。

45と46が本タイプの典型で、45は口径27.5cm、高さ29.6cm、底部径9.2cmである。頭部が締まり胴部と口縁部の最大径がほぼ同じとなる深鉢形土器で、全体形は後述する46とは口縁部の波状と平線の違いを除いて相似形をなす。口縁部は4か所の波頂部を備え、頭部には2本の幅広の並行沈線文が、胴部には大波文が周回する。総じて器壁は薄く外面全域と内面上位は丁寧にナデられるが、内面の大部分は条痕を残す。46は口径36.5cm、高さ38.4cm、底部径11.4cmの深鉢形土器で、胴部上部から内側にそばまる形状を呈し、その後口縁部が大きく外反して頭部を形成し、胴部最大部と口径がほぼ一致する形状となる。口唇端部を指で斜めに押さえており、胴部上部から口縁部直下までの施文帶も指頭による四線文を充填する。上位2本の四線文は口縁部を周回しており、胴部を並走する2本の四線文は鈎形文間に、右上がりの並走する四線文が重なりながら横方向（大波文）に展開する。なお、指頭による施文はこの1点に限られる。外面はほぼ全城を丁寧に撫で、内面もヘラで繰り返し調整を施して仕上げられている。

47は半截竹管状工具の筋状痕を強く残し、48は工具の外線部のみがスタンプされ端正な平行沈線文が残される。なお外面は丁寧なナデ、内面は丁寧なヘラ仕上げ。口唇部はナデにより丸く仕上げられている。47.49の2点は酷似する資料で同一個体の可能性が高い。47からは32cmの口径が復元でき、台形状突起は指で深く押さえられて鶴冠状を呈する。口縁部直下には半截竹管状の工具で沈線文を周回施文し、胴部上部との間の施文帶にも同一工具で右上がりの大波文を展開する。施文帶を中心には内面は横方向の粗い条痕仕上げがそのまま残され、また個性的な黒灰色の器面を呈する。50.51.52は口縁端部がやや外反する形状で52の口唇部は丸いナデ仕上げ、53の口唇部は二枚貝による刺突を深く密に刻む。54は波状口縁で口唇部は丸い撫で仕上げである。丁寧に撫でられた器面には大波文が筋状痕の明瞭な施文具で深く明瞭に描かれ。器壁は厚く重量感がある。55の口唇部も丸く、施文帶も丁寧に撫でられ、内面にはヘラナデ痕が良く残る。

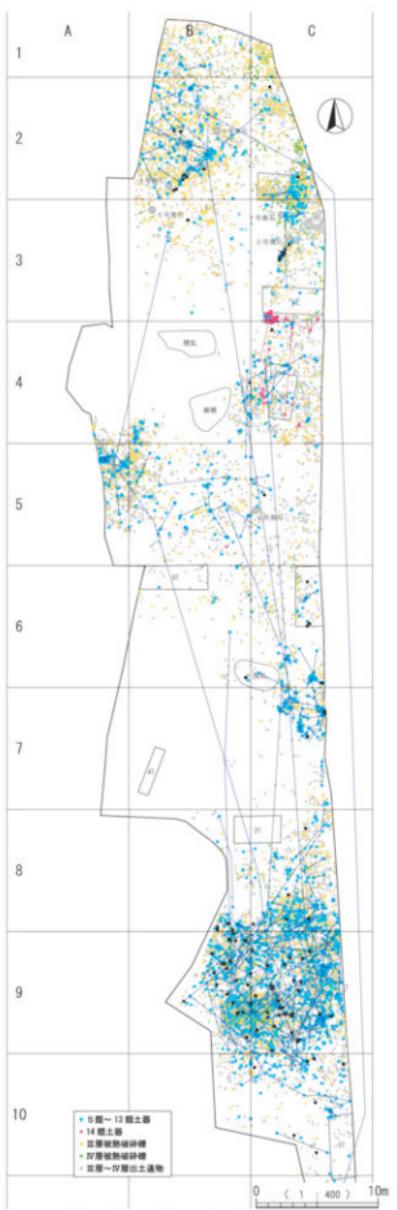
56.58.59の口唇部は丸く、63.64.65.66.67は平坦、68.69では尖る。また、66.67では胎土に含まれる小豆色の粒子が特徴的である。73は半截竹管状工具の外線部が明瞭に残るもので、先の48同様端正な平行沈線文として観察できる。74.75.76.77.78.79.80.82.83.84.85も半截竹管状工具の外線部が明瞭に残るもので、総じてこのグループの器壁

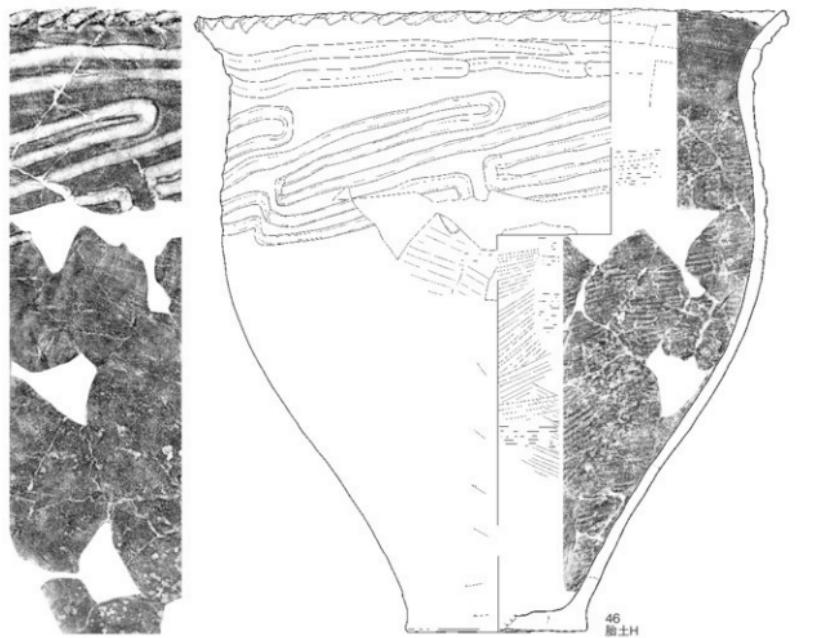
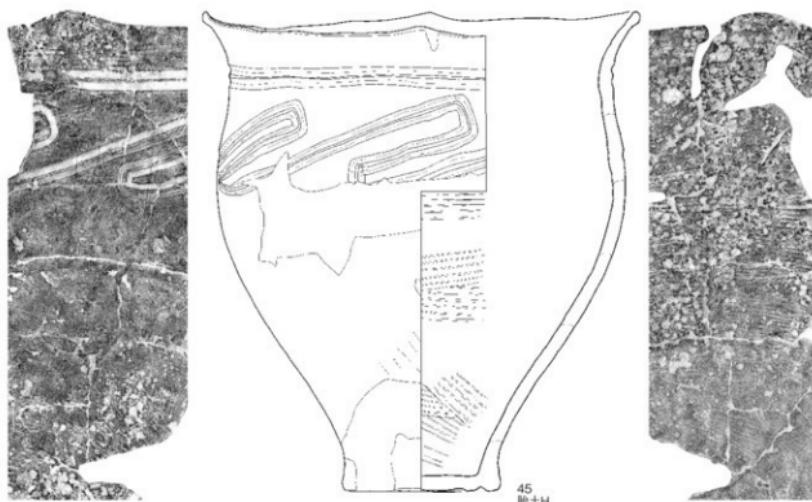
は薄い傾向にある。

86.87は口縁部のねじり紐突起が剥落したもので、86では半截竹管状工具による大波文の一部が観察される。87ではねじり紐突起と口唇部間に明かり窓が付けられ、ヘラナデ仕上げの器面に端正な平行四線文を施文する。88の口唇部は二枚貝による刺突文が施される。88.89.90の3点は口縁部直下に周回施文されたもので、特徴である曲線文は残されていないが、半截竹管状工具による施文具の類似性から本文類で取り扱った。91と92は同一個体で、突起部の5～6か所を二枚貝で斜めに刺突し、半截竹管状工具を深く押し当てて右上がりの大波文を描く。93は曲線文の状況から大波文と判断した。94は山形突起部の下位にS字の変形文を施し、器壁の薄い剥落する内面には条痕が観察できる。95は口縁端部に突起の一部を残すもので、大波文特有の右上がりとは逆方向の文様が展開する。なお内面は、屈曲部下部では丁寧なナデ仕上げを見せるが上部では粗い工具ナデが施されておりその違いが際立つ。96は口縁部が若干肥厚する傾向がみられ、口縁部直下に周回施文が残されるもので、特徴である曲線文は残されていないが、半截竹管状工具による施文具の類似性から本文類で取り扱う。97はねじり紐突起が剥落したもので、明かり窓を備えるとみられる。

98は復元口径23cmの深鉢形土器である。口唇部は丸く撫でて仕上げられ、器壁は薄い。内面はヘラ状工具で繰り返し撫でられ、外面は丁寧に撫でて仕上げられる。99は大波文が連想でき、100の口縁部は内弯する。101の大波文は曲線文から判断した。102.103は口縁部直下に周回施文が残されるもので、特徴である曲線文は残されていないが、半截竹管状工具による施文の類似からここで取り扱った。104は口唇部を二枚貝で連続して刻み、若干細めの四線文がみられる。105は平行沈線で施文し、胎土は凝灰岩粒や長石粒を多量に含み砂質性が高く、器面は明橙色に発色した化粧土的な仕上がりを見せる。106では四線文に半截竹管状工具が重ねられる。107は胴部上の屈曲部資料で、胎土は凝灰岩粒や長石粒を多量に含み砂質性が高く、器面は明橙色に発色する。108は工具を浅く押し当ててその外線部で描く。

109.110の文様は類似する。111.112.113では施文の水平化がみられる。115は突起部の内側を貝殻で刻み、筋状痕の明瞭な施文具を使用する。116の口唇部は失り気味に仕上げられる。117の口唇部は内側に頬き端部は尖り、内面は粗い条痕仕上げとなる。118の内面は粗い条痕仕上げ。119の器壁は薄く、丸味を帯びた口唇部は二枚貝で刻み、条痕仕上げの器面にやや細めの四線文で直接施文する。120は頭部から外反する形状で、器壁は極めて薄く硬質な焼成を成し、条痕仕上げの器面にそのまま描かれる。121では施文の水平化が進む。122は内面の横向方向が丁寧で、砂粒を多く含み器面はザラザラで、やや軟質な焼成を示し、長石粒を主に黒曜石片が含まれる。123.124.125の口縁部は外反する。126は緩やかな外

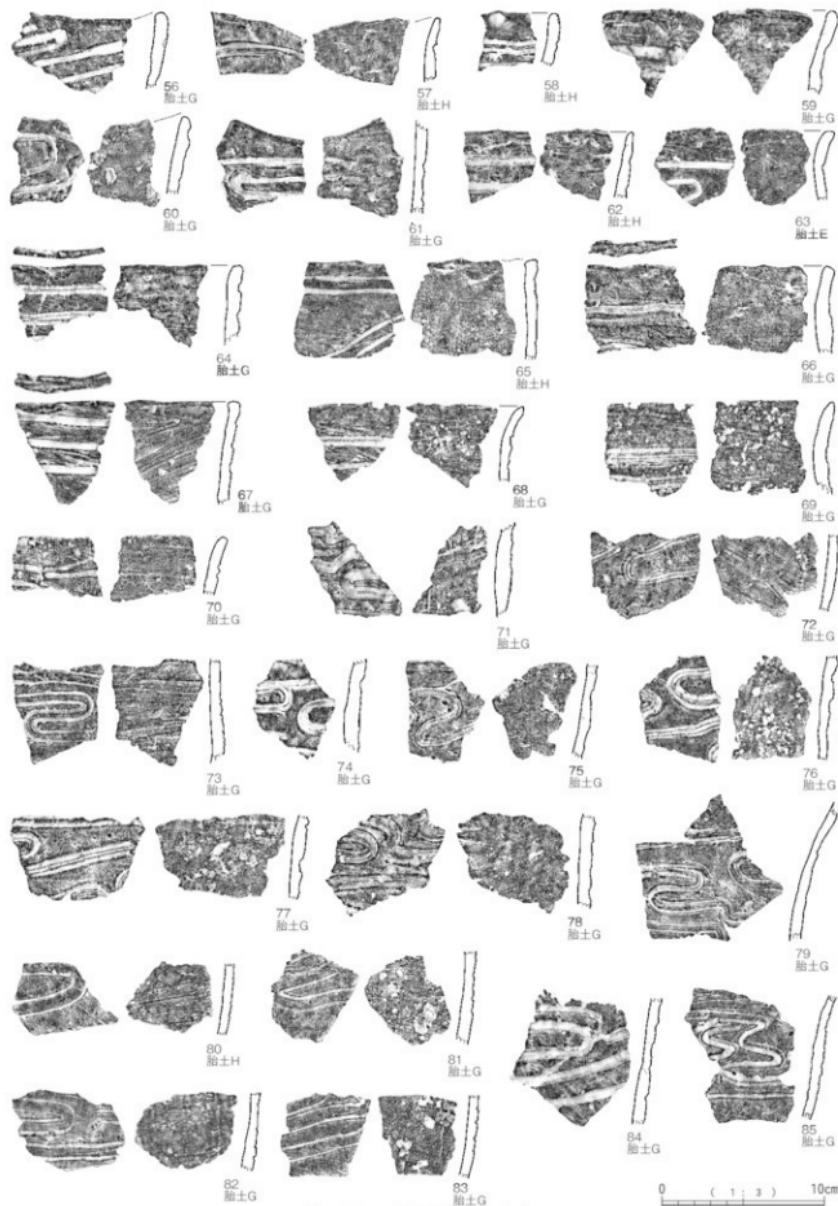




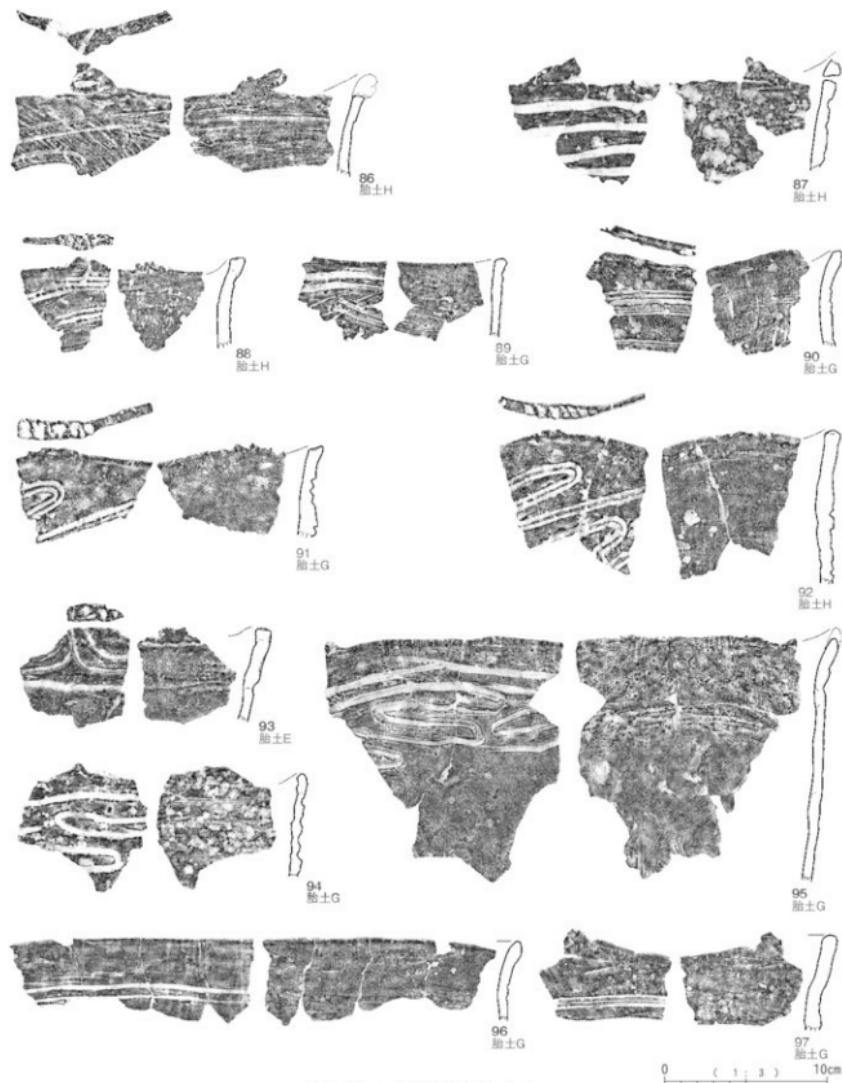
第36図 5類土器実測図 (1)



第37図 5類土器実測図 (2)



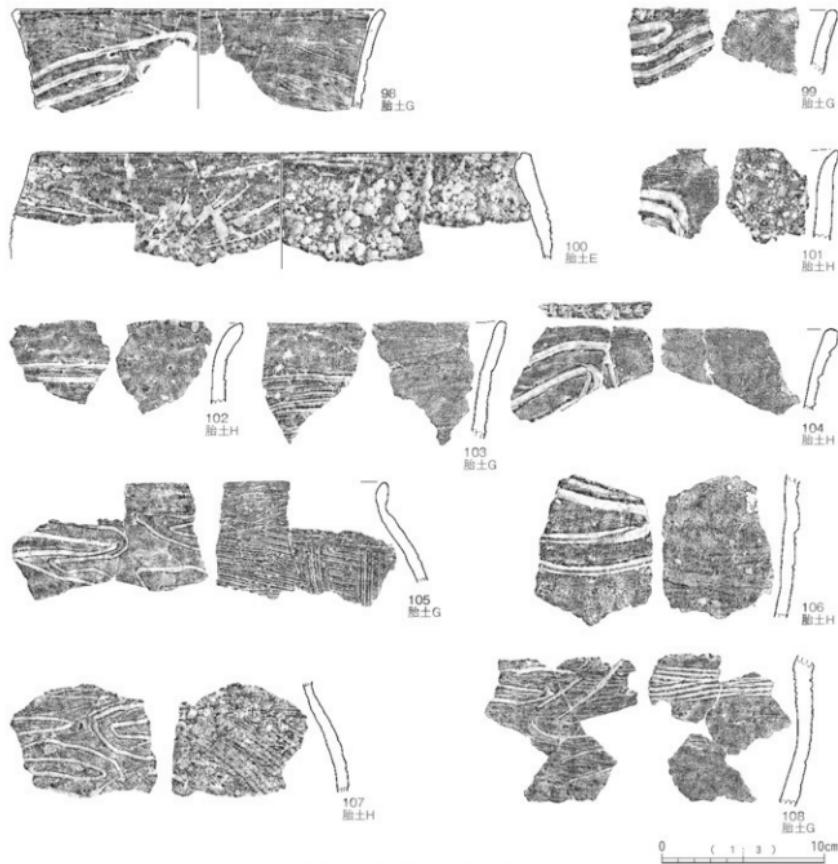
第38図 5類土器実測図（3）



第39図 5類土器実測図 (4)

反口縁である。127は器壁の薄い波状口縁部で、内面上位はヘラ削ぎ、施文帯は丁寧に撫でた後文様を施す。なお、口縁部は二枚貝で刻んだ後、撫で消した跡痕がみられる。128は条痕整形にそのまま施文する。129は岩粒や

長石粒、角閃石の目立つ胎土で、ヘラで施文する。130は直行し、131は緩やかな外反口縁で、長石粒の際だつ胎土である。

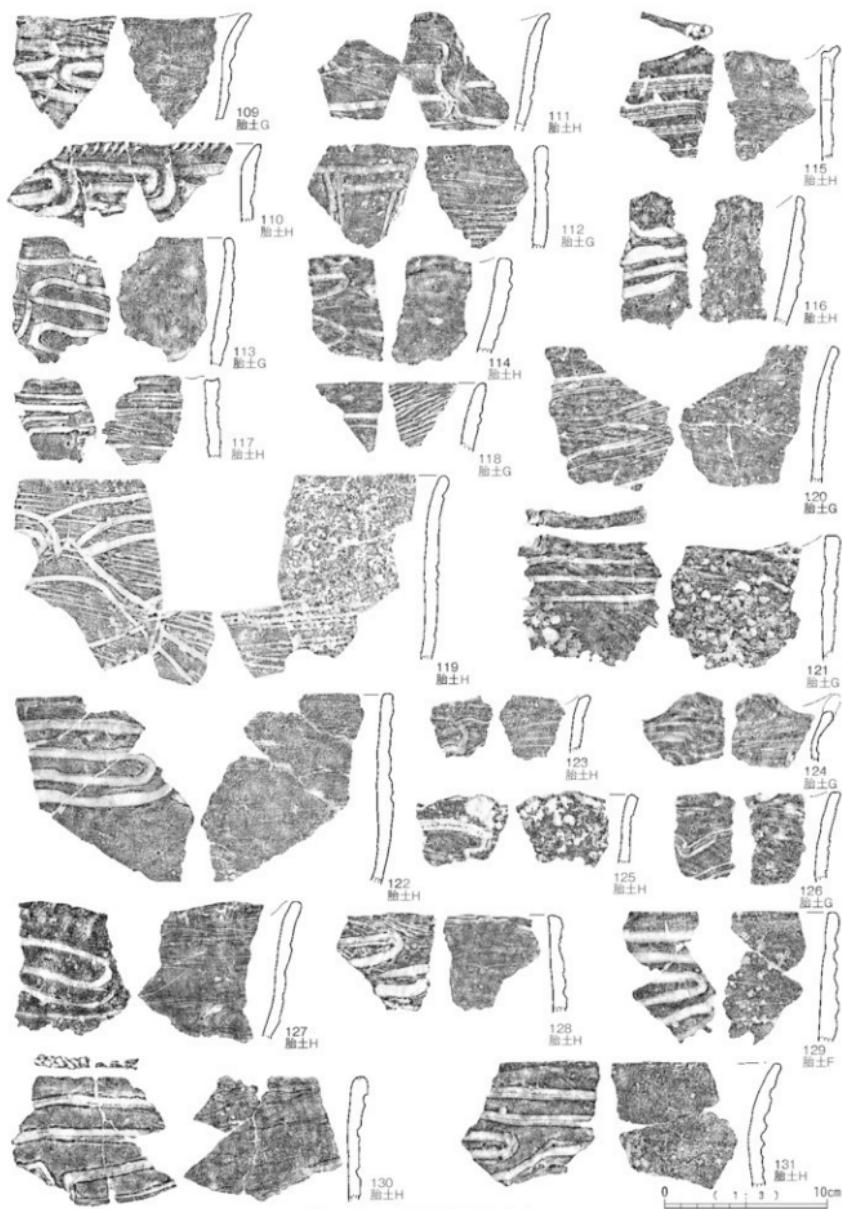


第40図 5類土器実測図(5)

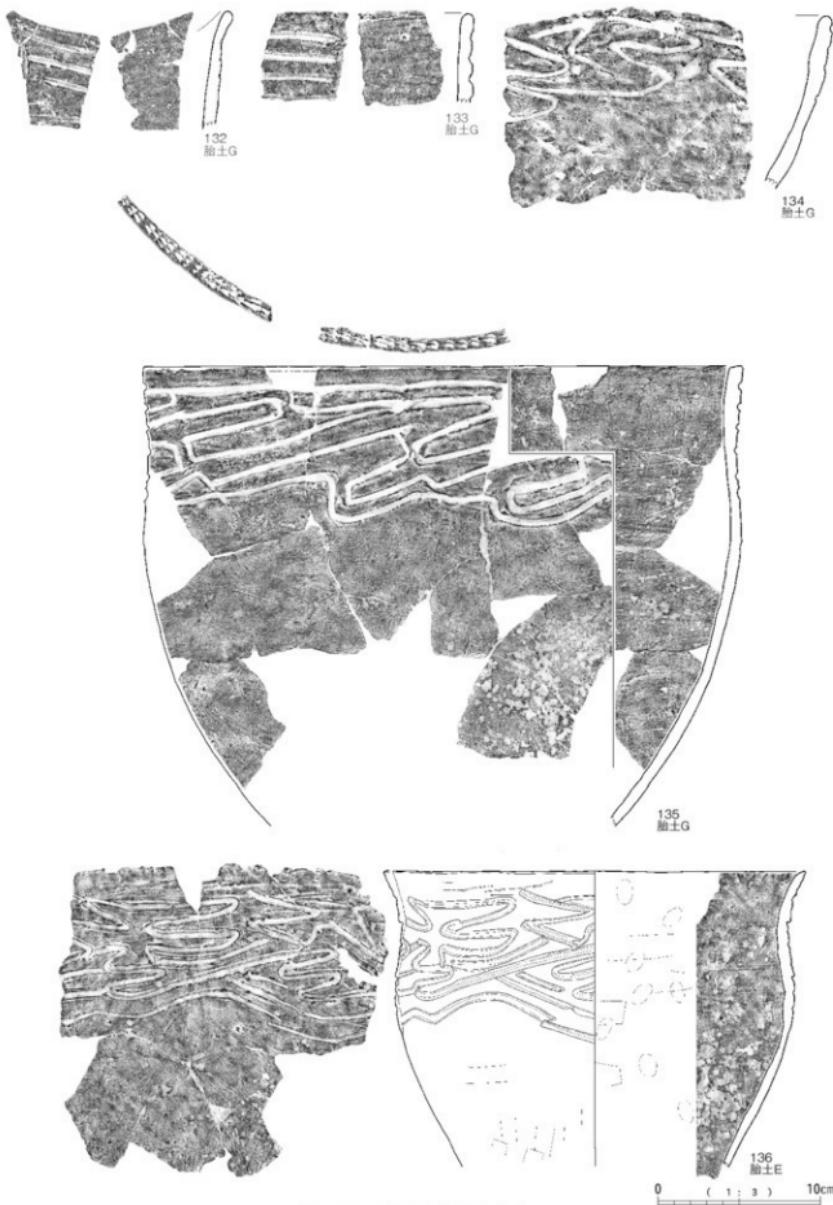
132,133の沈線文は浅い。134も136と同様の施工具を用い、類似する文様を展開するが重量感のある資料である。135は復元口徑37cm程度の平線口縁の深鉢形土器で、胎土はきめが細かく器壁は薄い。口唇部の二枚貝貼みは内側を起点に右から左方向に押し引く様に施され、器面調整は外面は丁寧なナデ、内面は口縁部周辺を中心ナデにより仕上げられている。施文は深く明瞭な沈線で施されており、右上がりの大波文が展開される。136は復元口徑26cmの頭部上位で緩やかに外反する深鉢形土器で、口唇部は尖り、外面は丁寧に撫でられる。施文は筋状痕の明瞭な細めの半截竹管状工具により行われ、特徴的な曲線文と大波文が描かれる。器壁は薄い。

第12表 5類土器観察表(1)

実(No.)	形(No.)	底(No.)	X幅	Y幅	Z幅	2倍幅	割合	グリッド	胎土	備考
45	15932	21.864	84.615	143.237	三		C-9			
	15933	21.795	84.694	143.244	三		C-9			
	15962	21.804	84.502	143.267	三		C-9			
	15963	21.851	84.450	143.241	三		C-9			
	17857	21.760	84.687	143.266	三		C-9			
	-18	0.000	0.000	0.000	三		C-9			
36	8056	22.397	86.264	143.369	三		C-9			
	15839	26.610	86.916	143.658	三		C-9			
	15887	23.284	86.866	143.452	三		C-9			
	15889	23.449	86.914	143.446	三		C-9			
	15890	23.471	86.791	143.476	三		C-9			
	15891	23.424	86.733	143.483	三		C-9			
46	15894	23.313	86.829	143.468	三		C-9			
	16900	22.732	86.754	143.459	三		C-9			
	17831	22.631	86.227	143.385	三		C-9			
	17835	22.946	86.741	143.396	三		C-9			
	153917	0.000	0.000	0.000	三		C-9			
	156937	0.000	0.000	0.000	三		C-9			
-18 0.000 0.000 0.000 三 C-9										



第41図 5類土器実測図 (6)



第42図 5類土器実測図 (7)

第13表 5類土器觀察表(2)

序番	通番	X座標	Y座標	面積	属性	グリッド	出土	備考
37	9550	23.548	84.015	143.792	三	C-9		
	47	11644	23.213	82.147	143.761	三	C-9	G
	18908	24.121	84.126	143.154	三	C-9		
	15776	0.000	0.000	0.000	三	C-9	G	
	48	-	0.000	0.000	0.000	三	C-9	G
	49	11717	0.000	0.000	0.000	三	C-9	G
	50	16754	17.271	79.851	143.025	三	B-8	G
	51	-	0.000	0.000	0.000	三	B-9	H
	13414	20.309	91.143	143.499	三	C-10	G	
	52	-	0.000	0.000	0.000	三	B-9	G
	53	-	0.000	0.000	0.000	三	B-9.10	G
	54	15771	21.716	89.796	143.363	三	C-9	G
	14469	23.965	86.859	143.567	三	C-9	G	
	55	15806	23.869	86.940	143.532	三	C-9	G
	-	0.000	0.000	0.000	三	C-9	G	
	56	12183	21.117	44.226	144.707	三	C-5	G
	57	16679	18.037	83.038	142.963	三	B-9	H
	58	5815	24.764	78.804	144.140	三	C-8	H
	16887	25.694	86.757	143.508	三	C-9	G	
	60	-	0.000	0.000	0.000	三	C-9	G
	61	8067	19.595	59.189	144.713	三	B-6	G
	62	-	0.000	0.000	0.000	三	C-10	H
	63	1192	22.256	85.679	143.464	三	C-9	E
	64	13505	19.600	80.750	143.430	三	B-9	G
	65	2596	23.867	88.163	144.581	三	C-2	H
	66	16610	17.206	84.350	142.836	三	B-9	G
	67	16621	18.062	85.134	142.911	三	B-9	G
	68	10458	14.829	21.702	144.365	三	B-3	G
	69	6296	18.522	79.886	143.422	三	B-8	G
	70	-	0.000	0.000	0.000	三	B-9	G
	71	19915	23.914	84.828	143.500	三	C-9	G
	72	16898	22.353	86.854	143.415	三	C-9	G
	73	17660	20.401	85.273	143.436	三	C-9	G
	74	16707	16.958	83.393	142.815	三	B-9	G
	75	9555	24.814	54.750	144.865	三	C-6	H
	12013	24.639	54.972	144.783	三	C-6	G	
	-	0.000	0.000	0.000	三	C-6	G	
76	-	0.000	0.000	0.000	三	C-9	G	
77	-	0.000	0.000	0.000	三	C-9	G	
78	14107	22.811	62.663	143.647	三	C-9	G	
79	-	0.000	0.000	0.000	三	B-9	G	
80	-	0.000	0.000	0.000	三	C-9	H	
81	-	0.000	0.000	0.000	三	B-9	G	
82	14213	22.967	78.979	143.811	三	C-8	G	
83	13428	25.216	94.023	144.011	三	C-10	G	
84	-	0.000	0.000	0.000	三	C-9	G	
85	-	0.000	0.000	0.000	三	B-9	G	
86	6531	25.392	98.125	144.573	三	C-10	H	
87	11998	18.097	79.347	143.347	三	B-8	H	
13752	18.245	79.328	143.365	三	B-8	H		
88	8725	24.838	81.622	143.955	三	C-9	H	
89	-	0.000	0.000	0.000	三	C-9	G	
90	16659	20.071	83.428	143.130	三	C-9	G	
91	10136	13.723	19.240	144.168	三	B-2	G	
92	12969	14.729	18.157	144.141	三	B-2	H	
18056	14.512	17.997	144.011	三	B-2	H		
93	-	0.000	0.000	0.000	I	B-1	E	
94	19568	19.526	80.717	143.303	三	B-9	G	
95	7010	18.222	80.625	143.329	三	B-9		
7016	18.342	80.701	143.336	三	B-9	G		
9095	18.749	80.762	143.360	三	B-9			
-	0.000	0.000	0.000	三	B-9	G		
2193	20.001	85.963	143.313	三	C-9			
96	-	0.000	0.000	0.000	三	B-9	G	
-	0.000	0.000	0.000	I	B-1	G		
-	0.000	0.000	0.000	I	B-1	G		
97	14012	23.367	88.270	143.666	三	C-9	G	

第14表 5類土器觀察表(3)

序番	通番	X座標	Y座標	面積	属性	グリッド	出土	備考	
98	10649	20.162	81.587	143.495		C-9			
	11626	24.247	82.199	143.935	三	C-9			
	18972	14.506	85.712	142.548	三	B-9			
	-	0.000	0.000	0.000	三	C-9			
	99	15537	24.672	90.644	143.626	三	C-10		
	100	10062	16.172	17.528	144.300	三	B-2		
	101	-	0.000	0.000	0.000	三	C-9	H	
	102	1539	23.114	76.997	144.174	三	C-6	H	
	103	2789	19.922	35.039	144.845	三	B-4	G	
	104	353	18.558	85.861	143.438	三	B-9		
105	10137	13.914	19.169	144.161	三	B-2			
106	18744	14.428	18.387	143.947	三	B-2			
107	6979	18.330	82.428	143.333	三	B-9			
108	4658	24.690	64.018	144.853	三	C-7	H		
109	15062	13.715	14.362	143.849	三	B-2			
110	16255	14.250	14.469	143.873	三	B-2			
-	0.000	0.000	0.000	三	B-2				
111	-	0.000	0.000	0.000	三	C-9	H		
112	6310	17.290	79.664	143.318	三	B-8			
113	18791	25.165	90.417	143.498	三	C-10			
114	-	0.000	0.000	0.000	I	C-7	H		
115	14337	21.568	10.789	144.124	三	C-2	H		
116	12047	19.767	84.394	143.388	三	B-9	H		
117	8286	27.603	90.866	144.048	三	C-10	H		
118	11677	21.378	82.789	143.354	三	C-9	G		
119	5985	24.511	71.558	144.648	三	C-8	H		
120	15805	23.850	89.027	143.519	三	C-9	G		
121	15549	19.677	88.695	143.225	三	B-9	G		
122	11035	18.965	86.630	142.889	N	B-9	H		
123	11390	18.915	86.714	142.879	V	B-9			
124	18440	20.517	88.067	143.306	三	C-9	H		
125	8125	25.851	59.609	144.831	三	C-6	G		
126	4465	24.642	51.359	144.887	三	C-6	H		
127	16730	18.817	81.809	142.963	三	B-9	H		
128	7146	21.752	30.767	144.758	三	C-4	H		
129	-	0.000	0.000	0.000	三	C-9	F		
130	-	21.361	87.049	143.414	三	C-9	H		
131	4234	21.378	86.617	143.346	三	C-9	H		
132	11415	19.391	86.623	142.887	V	B-9			
133	2796	18.596	80.181	143.461	三	B-9	H		
134	19064	21.942	87.781	143.306	三	C-9	G		
135	6014	20.211	79.364	143.620	三	C-6	G		
136	4699	26.071	61.967	144.911	三	C-7			
4692	26.102	62.126	144.916	三	C-7				
8062	26.041	61.973	144.902	三	C-7				
13357	26.089	61.927	144.873	三	C-7				
13284	23.153	23.707	144.850	三	C-3				
13294	22.820	24.114	144.843	三	C-3				
13298	22.574	24.327	144.819	三	C-3				
13299	22.668	24.317	144.832	三	C-3				
13300	22.775	24.411	144.842	三	C-3				
13302	22.734	24.442	144.853	三	C-3				
13303	22.668	24.469	144.823	三	C-3				
13304	22.609	24.524	144.877	三	C-3				
13306	22.351	24.620	144.793	復瓦	C-3				
13310	22.645	24.437	144.800	三	C-3				
13313	22.506	24.612	144.796	三	C-3				
13174	22.525	24.638	144.764	三	C-3				
13175	22.596	24.540	144.790	三	C-3				
13176	22.639	24.561	144.803	三	C-3				
13190	22.549	24.913	144.801	三	C-3				
13191	22.339	25.011	144.790	三	C-3				
-	0.000	0.000	0.000	三	C-3				
-	0.000	0.000	0.000	I	C-3				
9014	17.857	82.665	143.161	三	B-9				
9015	17.777	82.619	143.171	三	B-9				
10596	17.653	82.643	143.160	三	B-9				
-	0.000	0.000	0.000	三	B-9				